

私が体験した戦争と抑留

松 本 茂 雄

〔解説〕

二〇一七年五月二二日、大学史資料センターが担当するグローバルエデュケーションセンター設置科目「早稲田学」において、校友・松本茂雄氏による公開講義「私が体験した戦争と抑留」が開催された。この論稿は、当日の講演記録を基に、松本氏が大幅な加筆・修正を加えられたものである。なお、文章中で言及されている松本氏作成の資料は、末尾に一括して掲載し、文中の番号は末尾資料に対応している。戦争体験を中心とする松本氏の略歴は次の通り。

まつもとしげお
松本茂雄氏 略歴

一九二五（大正一四）年

福島県福島市生まれ。

一九三四（昭和一八）年

県立福島中学卒業。第二早稲田高等学院入学。

一九四四（昭和一九）年

勤労働員により印旛飛行場建設に従事。

一九四五（昭和二〇）年二月 陸軍入隊。「満州」虎林の迫撃第一三大隊に配属される。

八月九日 ソ連侵攻。

九月 ソ連軍の捕虜となり、以後、約三年間シベリアに拘留される。

一九四六（昭和二一）年九月 戦死公報が家族に届く。

一二月 シベリアより捕虜ハガキが家族に届く。

一九四七（昭和二二）年九月 戦死公報取り消し。

一四四八（昭和二三）年七月 帰国。早稲田大学政治経済学部に復学。

一九五二（昭和二七）年三月 卒業。

一九五六（昭和三一）年以降 東京トヨタ、リクルートに勤務。

なお、著書『火焼山——極限状況における国家と人間の生き証人』（文藝書房、一九九九年）がある。

貴重なご体験を詳細な記録にまとめてくださった松本氏に、心より感謝申し上げます。

目次

	(ページ)	文・資料	③ 学生から入隊へ
① 十五年戦争の歴史	74	141	75
② 昭和二十年の歴史	74	142	79
			146
			145
			144
			143

⑦ソ連の侵攻	79	②⑤シベリア強制抑留の三重苦	113
⑧ソ軍のT―三四型戦車	80	②⑥強制労働	116
⑨穆稜の攻防戦	80	②⑦想像を絶する苛酷な抑留	117
⑩肉攻用員選出	82	②⑧強制労働の事例	119
⑪小豆山の攻防戦	83	②⑨強制労働の事例(アムールスター)	120
⑫関東軍作戦計画訓令	86	③⑩捕虜の埋葬地	121
⑬第一二四師団 必死の抗戦	87	③⑪民主化運動の体験	122
⑭決戦下の命令	88	③⑫吊し上げ	124
⑮敵に発見さる	88	③⑬戦死公報と俘虜用葉書	126
⑯「満人」一家の犠牲	90	③⑭戦死取消しの通知	128
⑰牡丹江道路の突破	93	③⑮ダモイ	128
⑱天橋領に至る山道	95	③⑯帰郷	131
⑲開拓団との出会い	103	③⑰転入手続	132
⑳延吉からクラスキーノ	104	③⑱復員を歓迎しない世相	133
㉑非人間的貨車輸送	107	③⑲あの戦争は何だったのか	135
㉒絶望	111	④⑰加害	136
㉓シベリアの強制抑留所	112	④⑱私の心情	136
㉔コムソモリスク第二収容所	113	④⑲これからは	137
	164		182

松本でございます。よろしくお願いいたします。

私は皆さんの年頃、十九歳から二十三歳までの間に、早稲田を休学して戦争と抑留を体験し、生きて帰ることが出来ました。その体験をお話したいと思います。皆さんにお配りした資料はメモの紙だと思って自由に書きとめて、後でもう一度読み返して頂ければ幸いです。

それでは始めましょう。まず資料①「十五年戦争の歴史」をご覧ください。

私が幼稚園二年生の時、満州の柳条湖付近で鉄道が爆破されました。日本軍は中国の仕業だとして戦争を始め、それから長い年月、十五年も戦争が続きました。

前半の十年位まではうまくいき、南進作戦も順調でした。それが昭和十七年のミッドウェー海戦で敗れ、ガダルカナル島でも悲惨な事態となり、どうもうまくいきません。戦えば大敗続きとなったのです。

続いて、資料②「昭和二十年の歴史」をご覧ください。

昭和二十年四月にヒットラーがベルリンで自殺し、五月には同盟国ドイツが無条件降伏をしました。これで日本は世界を相手に孤立無援の戦いを続けざるをえなくなりました。そこで日本はソ連に対して連合国との講和締結の仲介を依頼するという、何とも行き詰った泥縄的な方針を決定したのです。しかし、それは思うように進まず、ソ連外相の会見引き伸ばしにあい、足を何度も運ぶだけでした。

そして六月、七月を迎えます。戦力の消耗は甚だしい上、日本本土への空襲が連日連夜続き、日本列島は崩壊寸前の有様でした。日本は本音では戦争を止めたいが止めることが出来なかったのです。

次に、資料③「学生から入隊へ」に入りましょう。

私は昭和十八年に第二早稲田高等学院に入學し、翌十九年に徴兵検査を受けました。大勢の真ん中に進み出て、素っ裸になり検査を受けたのです。私は第三乙種で合格しました。

当時は東伏見鍊成道場に行ったり、御殿場で軍の大演習にも参加しました。また、代々木の練兵場で昭和天皇臨席の觀閲式にも早高生として参列したことがあります。

それから、建物疎開というのがありました。天現寺の少し突き当り、今はトンネルになっていますが、あの辺は伊達跡といって大きな屋敷があつたのですが、その屋敷にロープをかけて「よいしょ、よいしょ」と片っ端から引き倒したのです。

九月になって、自動車部員の動員があり、私は東部軍経理部直轄事業として印旛飛行場で働くことになりました。

そして翌年二月、入隊通知が来たことを知りました。

―遂に来たか―

戦闘機の掩体壕の蔭でそれを知り、緊張したのを覚えています。

早速東京に帰り、高等学院に出頭して休学届を出しました。その時、佐藤慶二先生という方が主事をしておられ、先生から「頑張つて来なさい。そして出来たら帰つて来い」と短い激励を頂きました。体が奮い立つような感動を覚えました。それから新井薬師前の下宿先の荷物を片付けて、郷里の福島へ飛んで帰りました。そこで初めて入隊通知書を直接見たのです。

次に資料④「入隊通知」をご覧ください。

「二月二十五日、正午。郡山駅前に集合せよ 兵科・迫撃兵」。たったそれだけの簡単な文言が小型の葉書に書かれていました。それ以外は何も書いていないのです。普通、入隊する時は郷里の部隊に所属となります。何故、会津若松と書かないで、郡山の駅前なのだろうか、ちょっと変な気持ちでした。私はこの一枚の葉書で、そのまま海外の戦場へ連れて行かれたのです。

その日は寒い日でした。前夜からの雪は止み、道には三十センチほど積もっていましたが、町内会の人達が送ってくれて、駅頭では万歳々と何度も叫ばれました。

列車が福島駅を発車する時、機関車が雪でスリップし、列車が立ち往生してしまいました。大勢の見送り人がワースと列車を追いかけて来ましたが、その時、私の上の姉も追いかけて来て何か叫んだのです。私が窓を開けて身を乗り出すと、上の姉は手を差し伸べて私の手を固く握って、「きつとね。生きて帰るのよ」「生きて帰ると約束出来る？ 約束よ」と言いました。上の姉の目からは涙が流れていました。私は約束しました。「きつと帰るから待って」と言ったのです。握手した上の姉の手が氷のように冷たかったのを、いつまでも覚えています。

その時から、無事に帰って姉と再会するのが私の目標となりました。

列車は郡山に着き、そこで入隊予定者の十五、六人を集めて確認し、そのまま発車したのです。その日、二月二十五日の午後は東京の台東区や神田方面が大空襲に見舞われて、夜中にやっと着いた上野駅前は見渡す限り焼野原でした。空襲の惨禍はこの世のものとは思われません。山ノ手線は不通で、東京駅まで歩いたのですが、やはり一面は焼け落ちた残骸でした。

東京から大阪へ着き、東区の後藤旅館という宿に二泊することになりました。その時、下士官が「絶対に口外するな」という約束で、私たちが満州へ行くことを教えたのです。

―大変だ。まさか満州へ行くとは。早く家へ知らせなければ―

翌日、東区役所の屋上で軍服に着替える時、私は「便所に行きたい」と申し出ました。憲兵が数人険しい眼付きで見守る中を便所へ飛びこみました。そこで送り返す私服の裏地を破り、前夜書いたメモをこっそり奥へ押し込んだのです。「今、大阪にいます。私たちはこれから満州に行きます。元気ですから、安心して下さい」。私はそ知らぬ顔で私服を梱包し、荷物が何とか無事に届くことを祈ったのです。

その荷物が福島に着いた時の驚きを、上の姉が日記に書いています。「大阪より送り返された洋服から便りが見付かった時の嬉しさ」「晴れやかなこの日こぼれる涙かな」「きよらけき瞳なりけりいとほしの弟今日ぞ召されて往きぬ」。ただ、私がこの日記を読んだのは三年半経って、内地へ帰ってからのことでした。

次に、資料⑤「満州に入隊」に入りましょう。

私たちは三月一日の早朝、人目を避けてこっそりと大阪を発ちました。そして博多から朝鮮に渡り、牡丹江を経て虎林^{コリン}に到着したのです。福島を発ってから二週間も掛かっていました。

虎林はソ連と満州の国境の町です。初年兵がまとまって入隊するのは珍しく、古年次兵は勇み立っていました。彼らは「内地でぬくぬくと過ごしたお前ら」を一人前の兵隊に鍛え上げるといって、張り切っていました。「お前らのような奴は、戦になっても役に立たない」と、ことあるごとに頭を殴ります。何回でも殴るのです。

長い間、無人の国境警備に勤務して、気持ち荒んでいるようでした。それが、無抵抗の初年兵を迎えた時、憂さ晴らしに残酷な行動を許したのではないでしょうか。

私は、ヴィットコップ『ドイツ戦歿学生の手紙』（岩波新書、昭和十三年）という一冊の本を持って入隊しました。

この本は反戦思想どころか軍国主義的な内容なのですが、私がこの本を持っていることを班長が咎めたのです。「班長室へ来い」と呼び出され、長時間にわたり入口に立たせられました。日頃、物分かりのいい人に見えた班長でしたが、この時は手をブルブルと震わせて激しい怒りを現わしていました。私の前で本をビリビリと破り、ビーチカの中で焼いてしまったのです。私は呆気にとられました。私は何も悪いことをしていないのに。

その夜遅く、別の古年次兵が私を起こして別棟の物置小屋に引っ張り出しました。そしてやにわに標棒ひょうかんという砲撃の時に使う堅い木の棒で頭を殴りました。私は両手で頭を抱えて倒れました。彼は私を蹴り上げ「立て」と言って、続いて木銃で私の胸を突き飛ばしました。何回も何回も、狂ったように無抵抗の私を突き倒すのです。

私の頭からは多量の血が流れ、肋骨は折れたと思うほどに痛みました。私は心臓が高鳴り、息が絶えそうになりました。脂汗に塗れ、口の中がねっとりした感じになりました。長い時間の後、内務班に返ることが出来ましたが、体がわなわなと震えて止まらない。出血が毛布を広く汚していました。

興凱湖畔の国境警備

初年兵教育が五月で終わると、六月から興凱湖こうがいこ畔の国境警備を命じられ、移動しました。興凱湖は日本の琵琶湖の面積の六倍もあり、まるで海のように広がったのですが、ソ連と満州の国境線がそれを二分していました。

ここは大湿帯でもあり、見渡す限りの草原。湿地には鯉が多く、鶴や鷺の大群が住み、狼やノロが身軽に生存していました。以前、狼に腕を噛み切られた者がいたというので、不寝番も実弾を込めた小銃を手放せない有様でした。

また、湿地演習では重い兵器を肩に担いだまま底なしの沼に沈み、行方不明になった者もあり、特別の注意が必要

でした。

五月にドイツが無条件降伏したことは私たちには伝達されませんでした。無人地帯の真中にいる私たちには内地や国際関係の情報は入って来なかったのです。

しかし、目の前を走るソ連のシベリア鉄道は兵器や資材、糧秣などを満載して走る様子が見られ、重苦しい事態が迫ってくるのを感じました。

次に、資料⑥「迫撃砲」をご覧ください。

私が入隊したのは迫撃第十三大隊でした。この部隊は元々、ガス弾を射つ特殊部隊としてチチハルで設立されたのですが、ジュネーブ条約がガスの使用を禁止していましたので榴弾を射つ部隊になったのです。

迫撃砲は砲身・脚・床板きやくしよはんに分解して搬送します。特に砲身の反動を受ける床板は四十二キロもあり、射撃した後は敵からの反撃を避けるため、急いで分解して移動しなければなりません。重い床板も担いで、急いで別の場所に移動しなければこつちがやられます。四十二キロという重量は清酒入り一升瓶の二十本にも相当しますから、ひとりで搬送する苦労は並大抵ではありませんでした。

私は弾薬手でした。水色の絹袋に入った薬包を「射撃準備」の命令に合わせて弾尻よぐの翼に装着するのです。迫撃砲は多数の弾を一挙に発射するのが特徴です。そして、敵からは必ず反撃が来ますから一刻を争って別の場所へ分解搬送するわけです。

次に、資料⑦「ソ連の侵攻」をご覧ください。

迫撃第十三大隊は昭和二十年の二月に新設されたばかりの第二百二十四師団に編入され、六月末に穆陵^{ムウリ}へ移動することになりました。穆陵に急いで大陣地を構築せよとの命令です。いよいよソ連との戦闘が迫ったようでした。

関東軍の総司令部もいずれはソ連が侵攻するものと予想はしていましたが、それ以上に事態は急迫しました。ドイツが降伏してヨーロッパ戦線が幕を閉じ、ソ連は大量の軍を引き揚げてシベリアに送り込み、満州の国境に結集させたのです。

それが、前年までスターリングラードを包囲したドイツ軍を攻撃して見事に奪取したソ連の精鋭だったと知ったのは、日本が降伏して何十年も経ってからのことでした。

穆陵は、虎林が大湿地であつたのと違い、長白山脈の一部になる山岳地帯でした。穆陵は牡丹江を目指して侵攻する敵と戦う最前線です。山に洞窟を掘って砲を隠蔽し、地形を活かした壕なども掘らねばなりません。指揮班は地形を測り標定観測を急ぎます。一万五千の師団兵が山また山を堀り陣地構築をする姿は異様なものでした。

しかし、ソ連はドイツとの戦いに勝利したばかりなので直ぐに満州へは来ないだろうと希望的観測をしていたらしく、侵攻は来春だろうと予測していたといわれています。

しかし、八月九日が来ました。午前零時、大雨の降る中を、突如ソ連軍が雪崩のようにドバツと国境を越えて侵攻を開始したのです。

ソ連の総兵力は百五十七万。これに対して関東軍は七十万です。ソ連は五倍の大砲。戦車は五十倍でした。

私たちの師団は、定数一万五千でした。綏芬河^{スイフンガ}より侵攻した敵十五万と戦い、牡丹江を攻略しようとする敵を喰い止めるために必死に戦ったのです。なお、戦車や飛行機の支援は全くありませんでした。

続いて、資料⑧「ソ軍のT三三四型戦車」をご覧ください。

敵の主力はT三四と呼ばれる重戦車です。今でもハバロフスクのホテルの近くにある戦争博物館に二台置いてあります。当時、世界最優秀と評価されたもので、砲塔の一部丸味が印象的です。前面装甲は七十ミリ。口徑九十ミリの砲。機関銃六。時速五十キロで走りました。

資料⑨「穆陵の攻防戦」に進みます。

八月九日の深夜、敵は綏芬河を攻略し、そのまま翌日には穆陵に到達するものと覚悟したのですが、途中の綏陽の歩兵連隊が必死の抵抗を行ったため、穆陵に敵の先鋒隊が現れたのは八月十一日の早朝でした。

「来た！」

敵の戦車が次から次へと到着し、露地の中や川原も戦車で一杯になりました。

味方の洞窟が静かになったその瞬間、小隊長の甲高い叫びとともに足元の岩がゴム毯のように反跳はさずしました。同時に、轟音が天地を突き破り、洞内は崩れんばかりの衝撃を受けました。

「撃った！」

誰もが口々に何か喚きながら興奮しました。轟音が山波になって響きました。近くで重砲が発射されました。頭上を重砲弾が通ったのか、バリバリと天を引き裂くばかりの高音響が東方に走っていきました。敵味方の砲弾が入り乱れ、濃い硝煙が山肌を包みました。激しい砲撃戦が一日中続いたのです。

二日目、敵の戦車が一斉に山を登り、味方の陣地を破壊し始めました。後から後からと沢山の戦車が味方の陣地の中に入り、木を押し倒し、壕を押し潰しました。

次に、資料⑩「肉攻用員選出」をご覧ください。

指揮班から戻った柴田軍曹が全員を集めました。「どうも押され気味だ」と私たちを見渡し、ちょっと黙りこみました。そして急ぎ込んで言いました。「俺たちの中から五人の肉攻要員を出すことになった。誰か自ら志願する者はいないか」。私ははっとしました。軍曹は顔色を失っていました。しかし、誰ひとり申し出る者はいませんでした。軍曹の視線を避け、息詰まる思いで脂汗が流れました。胸の鼓動が痛くなり、体内を熱湯が走ります。少しでも動けば軍曹の目に留まり、選抜のきっかけになるでしょう。「志願する者がなければ、こちらから指名するしかない」。万一私が指名されたら……。私は石のように動けませんでした。しかし、それは瞬時に近いことでした。軍曹は私の名前を呼びませんでした。

穆陵の少し先、牡丹江の南に石頭セキトウという所がありますが、ここには陸軍の予備士官学校がありました。そこでも八月十三日から十四日にかけて約二百名が決死隊となり、体に爆弾などを結び付け敵戦車の下に飛び込みました。ソ連軍総司令官マリノフスキーも手記に書いていますが、字義通り壮絶の一語につきる戦闘でした。

三日目の夕方に突然、部隊移動の命令が下りました。移動とは陣地を放棄することなのか、一時的な場所の転換なのか分からない。「必要なものは出来るだけ持て。もう帰って来ないから」というのです。どういことなのか。穆陵はまだ負けてはいないのに。情況の説明がないので訳が分かりませんでした。

私は弾薬手として四発の弾を胸と背中に分け、弾囊に入れました。軍袴の物入れには二個の手榴弾、帯革には小銃弾をばらして入れました。そして二個のアンパン地雷を腰にぶら下げ、三袋の乾麵包かんめんぼうを入れた雑囊を肩に掛け、水筒を持ちました。最後に騎兵銃を持った時、誰もが一度も経験したことのない重量になっていました。

口喧しい怒鳴り声と装具のおつかり合う音が、物々しい雰囲気になっていました。何時の間にか霧雨が音もなく降って、肩を濡らしていました。私は不安でした。

装具の重さは想像を絶したもので、私は両足で立つのもやっとでした。空気は冷たく、濃霧が湧くように広がり、辺りは見えません。時々、思い出したように恐ろしい地響きが私たちを追いつてきました。「味方の将校服を着て紛れ込んだスパイがいるようだから、みんな余計な口をきくな」「黙ってついて来い」と言って、中隊長は暗い霧の中に入っていました。

隊列は斜面を下り、谷川を渡り、崖を登った。草を掴み岩肌を引っ掻いた。どんな小さな物にも躓いて転んで、転び続けました。

湿った冷たい夜の空気と鼻を衝く夏草の匂い。そして不気味な静寂。重荷を身に着けたこの夜の移動は、私にとって地獄のような苦しみでした。

次、資料⑪「小豆山の攻防戦」に入りましょう。

早朝、目が覚めると私たちは雑木林の中に寝ていました。近くで中隊長が出発の準備をしています。私は命じられて隊長の水筒を火にかけ、沸騰させて差し出しました。隊長は馬に跨り、上から手を伸ばし受け取る時、チラと私を見ました。しかし、隊長の目は遠くの何かを見つめているようでした。

中隊長と初めて出会ったのは大阪の市内の御供、二度目は初年兵教育の終わる頃、幹部候補生の選抜で隊長に直々に面談した、ごく短い時間でした。今度は三度目になります。何かの腕章をつけ隊長と二人で大阪市内を巡り歩いたのが、無性に懐かしい感じがしました。これは二人だけが分かっていることです。隊長は私を理解してくれる唯一の

上官でした。

しかし、隊長は私の差し出す水筒を馬上から受け取ると、そのまま馬に一鞭当てるや林の中を走って行ってしまいました。

何か一声でも言葉をかけてくれるかも知れないと淡く期待していた私は、置き去りにされたような気がしました。後姿を見送ったことが後々まで深く印象に残っています。

私たち第二中隊の砲隊が林の中を出発したのは八月十四日の午前七時頃でした。しばらく進むにつれ、大勢の部隊に出会いました。何かが刻々と迫り、その対応に追われていたのです。

突然、眼前の霧が少し晴れ、中から見上げるような大きな岩肌が現れました。雨に濡れ黒い岩がのしかかるように頭上から迫ってきます。私は何だか嫌な、不吉な予感がしました。

これは軍関係者が通称小豆山あずきやまと呼んだ、独立した小さな山でした。高さは百五十メートル、長さ二キロ程の山で、南側に柳毛川りゅうもうがわの支流が細々と流れ、三百メートル程の狭い山間は溢れた水で湿地になっていました。

ソ連の大軍は穆陵を攻撃しながら、他方では牡丹江の攻撃を開始しようとしていました。そこで我が師団は、穆陵の後方にある小豆山に敵を引きつけ、再度の攻防戦で時間を稼ぎ、敵の牡丹江総攻撃を遅らせようとしたのではないかと思われました。

各部隊は小豆山の山頂に指揮班や観測班などを設け、山裾に砲隊などが陣を敷き戦闘準備に追われました。

午前十一時、敵は北方から野砲を一発射ち、それを合図にしたように砲を射ち始めました。これに抗して我が軍も射ち始めたのです。地面が激しく揺れ、小豆山は崩壊するばかりの衝撃です。硝煙は白い煙幕となり、山の木々に絡みつきました。立木はブスブスと燃え始め、あちこちに火の手が上がりました。

我が迫撃砲は観測班からの指示を待つ間もなく、「全弾各個に撃て」との号令が来ました。あるだけ射てというのです。無我夢中でした。連続発射が続きすぎ、砲身が焼けて不発弾が目の前に落下する有様です。急いで湿地から水を汲み、砲身を冷却させながら射撃を続けました。

午後一時頃になると砲撃もなくなって白兵戦に突入しました。砲弾を撃ち尽くせば、砲兵は帯剣で斬り込み、手榴弾を投げるしかありません。山裾を巡る一本の道や湿地の中で、何千という日ソ両軍が相手に斬りかかります。日本軍は帯剣とわずかの小銃や手榴弾で、ソ連軍は自動小銃で、「突っ込め」の号令が聞こえ、「ワーツ」という悲痛な叫びが入り交じって聞こえました。

私たちの砲隊の側に、何時の間にか他の部隊が集まっていました。手に木の枝を持ち、剣を結び付け即席の槍を作っています。隊長らしい人物が馬上から、これから出陣する旨を述べ、東方へ宮城遙拝を済ませると、「では行くぞ」と号令して、全員が駆け足で斬り込みに向かっていききました。

さて、最後の砲撃が終わる頃、誰かが大声で叫びました。「中隊長戦死！」兵たちの動きが一瞬止まりました。

——本当か？まさか中隊長が——

そして次に、誰も彼もがワーツと何かを叫んでいました。私は行動と気持ちの支えを一度に失って、茫然と立ち尽くしました。体が動かなくなっただけです。隊員に強い動揺が走りました。

八月十四日、未明小豆山到着敵戦車と戦闘開始

戦死（行方不明）者

中隊長中尉嶋田仁一（福井） 軍曹梶塚修一（不明） 伍長浜田三郎（宮城） 三卷由与（新潟） 松本茂雄（福島） 高橋末吉（福島） 渡辺栄吉（新潟） 木田清吉（福島） 佐藤進（宮城） 阿部邦夫（宮城） 中川洋一（新潟） 堀川勝男（長野） 相沢平

八郎（新潟） 松平清水（富山）

嶋田中隊長戦死の為、山田栄一少尉中隊長代理となる。

（迫撃第十三大隊史編さん委員会編集・発行『迫撃第十三大隊史』一九八〇年、四二一～四二三頁）



初年兵時代

後々に聞いた話では、山頂の隊長の壕に敵の砲弾が集中し、隊長は頭部に直撃弾を受け、双眼鏡を首に掛けたまま、前のめりに壮烈な最後を遂げたということでした。八月十四日午後二時、それは一瞬のことでした

その同じ時刻、東京では昭和天皇がポツダム宣言受諾を聖断されたことを後に知りました。もし少しでも早くその決定がなされていたら、前線の戦闘はどうなっていたでしょう。うまくいけば中隊長が戦死されることもなかったのではないのでしょうか。

中隊長が戦死し、うろたえる私たちに矢継ぎ早の命令が飛びました。「砲を破壊しろ」「早くしろ。早く」。これまで、命よりも大切にせよ、と教えられてきた砲を破壊しろと言われても躊躇してしまいます。砲身を槌で叩いても跳ね返るばかりです。手榴弾を発火させて砲口から中へ投げ込みましたが、爆発してもビクともしません。やむなく穴を掘り砲身や照準器のついた脚を土中に埋めました。

小隊長が大声で言いました。「よく聞け。向こうのあの森へ移動するから、必ずついて来い。遅れる奴は敵に射たれるぞ。走れ!」。小隊長の指差す方向を見定めて、残った者は全力で走りました。湿地から喊声が続いてきたのです。

次に、資料⑫「関東軍作戦計画訓令」をご覧ください。

これまで私が述べたことを、今の時点で総括してみたいと思います。当時は極秘扱いで、私たちは知り得ないものでしたが、今は公開されているものです。

そもそも関東軍司令部が昭和十九年に作成したもの（右半分）を、時局の緊迫に伴い、昭和二十年の一月に追加（左半分）して上申したもので、対ソ持久戦の基本方針書です。これによると、侵攻してくるソ連軍に対しては国境地帯において抵抗し、その抗戦部隊は玉砕させるという衝撃的なものです。しかも兵力や武器資材の追送補給は原則として予定しないのです。

国境地帯で抗戦するのは私たち第百二十四師団です。ソ連軍が侵攻したら徹底抗戦し、援軍もなく、その場で玉砕せよと命令したのです。

これは極秘命令ですから、もちろん私たちはそんなことになっていくとは知りません。玉砕させることを基本方針として初年兵を入隊させ、開拓団も義勇隊も入植させられたのです。

ですから、ソ連軍の侵攻が始まった直後、牡丹江郊外に駐屯していた戦闘機や爆撃機などは、地上部隊が肉攻での抵抗を始めた頃、友軍を見捨てて日本へ帰ってしまったのです。第百二十四師団は何とも悲惨な犠牲の師団でありました。

次に資料⑬「第百二十四師団 必死の抗戦」をご覧ください。

私たちの第百二十四師団は定員の一万五千。ソ連軍は十五万。十倍の敵と戦ったのです。日本の軍隊は古い精神主義の軍隊でした。戦陣訓にあるように、絶対命令と絶対服従を徹底実行させました。ですから、下位の兵は不明な点があっても聞きただすことは許されません。また、死は名誉であるとして、「従容として悠久の大義に生くることを

悦びとすべし」と教えたのです。いくなれば建前主義に生きよといわれたのでした。

これに対してソ連軍は近代的重装備に注力し、T三四という重戦車、マンドリンという優秀な自動小銃や、改良した狙撃銃などで戦ったのです。

その結果、関東軍総司令部が予定した通り、玉碎しました。六名の部隊長が戦死し、生存者は千二百人。バラバラに四散消滅したと記録されています。穆陵や小豆山の周辺には累々として遺体の山が棄てられていたのです。

続いて、資料⑭「決戦下の命令」をご覧ください。

先ず上の方です。満州における戦争の大方針として、昭和二十年一月から八月までに三つの命令が出ています。

「玉碎せよ」と「楠公精神に徹せよ」と徹底抗戦を命じながら、「満州を放棄してもよい」との意を含めた上で、「朝鮮を保衛すべし」と命じているようですが、とても分かりにくい。内容が不統一で、戸惑います。

抗戦を続けながら朝鮮に退却せよというのであれば、玉碎という絶対命令はどうなるのでしょうか。また、停戦命令を出しても大混乱の戦場では極めて不徹底になります。その挙句は「統帥を解除」といわれても、聞いた方は啞然とするばかりではないでしょうか。そこには命令や意思決定、そして革新性などの大きな問題があると思われるのです。

後で、ゆつくりこの表を見て考えていただくよう、お願いしたいと思います。

さて、資料⑮「小豆山の麓で敵に発見さる」に入りましょう。

私たちは森の中で一時待機せよとの指令を受けたようでした。しかし食料は全くななくなっていました。そこで、戦

關から三日程経っていた小豆山に行けば何とかなるかも知れない、捨てたものもある筈だ、少し気味悪いが、行ってみるだけのことはあるだろうと思いました。見習士官に伝えると、「夕方までには帰ってこい」と言われました。

二人の初年兵と森を二つ三つ抜けると、小豆山が見えました。道や湿地には沢山の遺体が折り重なって倒れており、水の中に沈んだ遺体も多くありました。ここは友軍の墓場となっていました。彼らの靈魂はもう天に昇ったのだろうか。気を取り直し、遺体の掛けている雑囊や上衣の物入れに手を入れて、少しでも何か残っていないかと探し始めました。気味が悪いのですが、仕方なかったのです。

その時、仲間が「おい！」と鋭く叫んで遠くを指差しました。見ると小さなジープが一台、砂煙を上げてこっちへ来ます。「しまった、敵だ。逃げろー」。途端に山間の静寂が破られ、パーンと銃声が響きました。続いてピッピッと耳元を弾丸が掠めます。初年兵の二人は森の方に走りましたが、私は小銃を持ち二発の手榴弾をズボンに入れておいたので思うように走れません。肩に掛けた銃の握りが背中に強く当たり、邪魔になってしまいます。

—このままでは射ち殺される—

私は逃げ切れなと思った瞬間、道端の草むらに頭から飛び込みました。狙われている。少しでも早く身を隠すのがいい。湿地は水が溢れ、草が伸びています。

ピッピッと弾が飛んで来る中、私は草の中に突っ伏しました。ダダダダ…と銃声が鳴り、周囲の草が千切れて吹っ飛びました。慎重さと焦る気持ちで体中が火のようになりました。

蒸れる夏草と籠る死臭の中で、私は平蜘蛛のように身動きが取れません。真上から焼けるような太陽が照りつけていました。

敵は二、三人でした。私は小銃を持っていましたから、敵の一人は倒せると思いましたが、もしそうすれば他の者

が自動小銃でこの一帯を乱射するだろう。向こうは一度引き金を引くだけで百発近い弾丸を発射できるのです。また、私が手榴弾を投げれば一挙に敵を殺傷できるでしょうが、敵の眼の前で投擲姿勢を取ると姿をはっきり見せることになりますから、自動小銃の明確な目標になってしまいます。

それでも私は一か八かでやるべきなのか。そうこうするうちに、敵は手榴弾を二、三発投げてきたため私は爆風で耳が聞こえなくなり、続いて敵は自動小銃を打ちまくってきました。私の胸の物入れには、父から貰った愛用のロンジンの腕時計と、上の姉が買ってくれたシガレットホルダーがありました。胸の上から触るとそれが分ります。

―死ぬことはない―

私は生きる勇気が大事なのだとはつきり思いました。

私はその後、長時間水中に隠れていたような気がします。しかし実際には、それほど長い時間ではなかったかも知れません。やがて、私はこの場所から脱出することに決めました。この一帯の数知れぬ日本兵の靈魂が私の脱出の成功を祈り、支えてくれるに違いない。私は胸が熱くなり、緊張の極限にありました。

一方、私の二人の戦友は遠くから様子を見ていましたが、その場で射殺されたかも知れないと隊に帰って報告したようで、見習士官は私を「行方不明」と処理したようでした。

後のことですが、戦友たちが日本に帰国した時、舞鶴の復員局が聞き取り調査を重ね、私を死亡と認定して、福島県に「戦死」と連絡したのでした。

次は資料①⑥「満人」一家の犠牲」に入ります。

私は小豆山の麓へ食料を探しに行ったのですが、そこでソ連兵に発見され帰れなくなりました。そこからやっと脱

出することができ、元の戦友たちがいる山中に戻ったのですが、いくら探しても誰もいません。二、三十人はいたはずなのに何の気配もありません。「おーい」と木立に向かって叫んでみましたが、返事はありません。どこへ行っただ。私はひとり静寂の中に吸い込まれそうで茫然となりました。

私は果てしない大陸の未知の森の中で、ただひとりになったのです。森の奥の方から風の音がゴーツと聞こえます。どこへ行けば人がいるのかも分かりませんし、地理も分かりません。言葉も分からないのです。

その時、近くの木の下に紙が貼ってあるのに気付きました。急いで近寄ってみると、鉛筆の走り書きで「部隊長の命により、寧安^{ねいあん}方面に向かって出発する。下の道を南に向かって速やかに追求せんことを請う。村上見士」とありました。

私は茫然として言葉もありませんでした。寧安といってもただ離れているのか、寧安のどこに行けというのか。地図がありません。夕方までには帰ってこいという命令を守らない罰なのか。面喰らったような気持ちでもありました。

何も分からない、誰もいない。限りのない大陸でひとりにされて投げ出された体験は初めてです。軍隊の教育訓練でも全く行われたことはありませんでした。

それからしばらくした時、突然何人かの兵が現れました。師団司令部からの命令受領に出された連絡兵の五人でした。彼らも立木に貼られた紙を読んで声を上げました。「なんだこれは。部隊長の命だ」と。命令を出しておきながら、自分たちの帰るのを待たずに出発してしまった本隊を知って啞然としたようです。彼らも棄てられたのと同然でした。「暗くなると道が分らなくなるから、すぐ出発だ」。小野寺伍長の言葉に他の人間も腰を上げました。寧安行つて、何をどうするというのか。具体的には誰も分からないが、そうするしかないのです。

夕暮れが迫って来ました。一行は伍長と上等兵、それに私たち初年兵四人だけでした。先のことを考えても、何も分かりません。ただ寧安方面に急ぐだけです。

少し進むと道端に「満人」の家がひとつありました。草の中に崩れかけています。急いで通り過ぎようとした時、恐ろしいものを見たのです。三人の子供を含め、一家五人が仰向けに並んで死んでいたのです。彼らは、汚れた青や赤の服らしいものを身に着けていました。彼らはここ四日ばかり、彼らは森に隠れる私たちのために、水を汲んだりして精一杯の協力をしてくれたのです。協力して助命を図ったのです。

—まさか—

と思う反面、

—やっぱり殺したのか—

とも思いました。間もなく、ソ連兵が来て「日本兵は何人くらいいたか？どちらの方向へ行ったのか？」と彼らを詰問するでしょう。その結果、私たちのことを喋らざるをえなくなるでしょう。それは、私たち日本兵が一番恐れなければならぬことでした。

左から二番目に小孩シヤコハイが倒れていました。いつか私が「謝々」と言った時、少し笑いかけてくれたことを思い出します。どこかに子供らしさもありました。私は「満人」の倒れている傍に行つて、「すまなかつた」と言つてやりたかつたのですが、着衣の青と赤が妙に気味悪い。五人が並んでいるのが死の儀式にも見えて、草を踏んで空地に入るのが恐ろしかったのです。その片隅に赤い彼岸花が燃えるように咲いていました。いわれある死を弔う密やかな供養だと感じられました。

次に、資料⑰「牡丹江道路の突破」に入りましょう。

狭い林道で敵に出会うかも知れなかったので、伍長が拳銃を握って先頭に立ちました。暗くなった道端に、一寸ばかり土を盛った小さな十字架が立っているのに出会いました。鉛筆書きのロシア語があります。「ロスケの墓だ」と誰かが言いました。勝ったソ連軍にも犠牲が出て、人知れぬこの山中に埋められたのでしょうか。場所はいずれ忘れ去られるに違いなく、そもそもこの場所では見つけて訪ねることも不可能です。彼について、どんな思い出が残るのでしょうか。かりそめに生きた歳月の思い出を、誰が語り継いでやれるのでしょうか。

伍長が、この辺りで寝ることにするとつぶやきました。暗くなれば方向を誤ることもあるでしょう。なによりも、体の疲労が限界に達していました。私は灌木が地面を覆い被さったところを選んで潜り込みました。生も死もなく、とにかく休みたいと思いました。そこは自分だけの世界で、怒号も砲撃の音も何もありませんでした。

寒さに震えながら静かに目を瞑ると、半年前の日本の生活が遠く甘美な思い出となって戻って来ました。「きつと帰って来るのよ。いいわね」と上の姉が私に話しかけるのでした。

翌日、森を抜けると、二百メートルばかり先を一本の道路が走っていました。「牡丹江道路だな」と伍長が言いました。国境の綏芬河から穆陵を通って牡丹江に至る幅十メートルの軍用道路です。その道路をソ連軍のトラックが縦列に数珠つなぎになったまま、牡丹江方面に走っていきます。重装備車も混ざって後から後からとぎれず、何百台あるのか何千台あるのか分かりません。あらん限りの兵士や兵器弾薬を前線に補給し続けているのです。「凄い！私」は息を呑みました。後続の車は、ピタリと前に接続して車間を空けません。

しかし、私たちはここを突破しなければ寧安方面には行けません。引き返せば戦場跡があるだけです。どうしても突破しなければなりません。「どうする？」と伍長はみんなの顔を見渡しました。無事を保障するものは何もありま

せん。進むか戻るか。伍長はみんなに水筒の蓋を出させました。「今夜、夜中に決行しよう。犠牲が出てでも仕方ない。一人でも二人でも生き残った者で行くぞ。武運を祈って水杯を交そう」。伍長は全員に水を注ぐと、一気に飲みました。誰にも自信はありませんでしたが、やるしかありません。

しばらく仮眠して、やがて起こされました。敵の車列は相変わらずで、トラックのライトが長い一本の光の帯となつて眼前を走っていました。私たちは山を下り、細心の注意で道に近寄りました。トラックの轟音に混じつて頭上からソ連兵の大声が聞こえます。

その時、上等兵が状況を偵察してくるから待てといつて見えなくなりましたが、一時間近くも経つて意外に元気に帰つて来ました。その偵察によれば、道の手前には溝があつて隠れるのに好都合、百メートル先に道がカーブしている所があり、後続車のヘッドライトが前の車の後部や路面から少しずれる。一瞬だが暗い影を作る所があるということです。また、女性兵士の乗った車には銃を持った兵が少なくも知れないから、射たれる危険は少ないだろうとも言いました。「よし、分かった。行くぞ」と伍長は言いました。

私たちはカーブ付近に近寄り、じつと機会をうかがっていましたが、突然誰かが飛び出しました。しかし銃声はしませんでした。うまくいったのかも知れない。

次の好機を待ちましたが、ライトの切れ目がないのでチャンスがつかめません。心臓が蹴られたように痛みます。

一台の車がカーブを走り去ったその時、私は飛び出していました。左から大型の箱型トラックがのしかかるように迫っていました。私は背を低く丸めてためらう間もなく一気に走り、そのまま道の向こう側に転げ落ち、何度か反転しながら湿地の中に落ちました。夢中で横這いに逃げようとした時、谷地坊主の硬い葦のような草で顔を切つたのを覚えました。

最後と思しき者が走り抜けた時、気のせいか車のスピードが落ちました。自動小銃の音が聞こえ、曳光弾の光が流れ、敵兵が間近で大声で叫び始めました。「来たー」。敵は数メートル先を駆け抜けて、自動小銃を闇に乱射しました。敵の足音や固い靴の振動が、平蜘蛛のようになった私の顔面近くの土をドタバタ叩いていきました。

次に資料⑱「天橋領に至る山道」をご覧ください。

牡丹江道路を突破した私たち六名は、先の本隊を急いで追いかねばなりません。しかし地図がありません。林道らしい小道を辿り、とにかく南の方向に歩き続けるだけでした。

私はいつも何かに後を付けられているような感じに襲われました。後ろの木の陰から、じっとこちらを見つめながら追いかけてくる感じで、とても気になったのです。いつも見られている、追いかけているという感じでした。他方で、この道でいいのだろうか。間違っていたらどうしよう、という不安も募りました。

穆陵の戦闘以来、連日の疲労がどっと出てきました。伍長は私たち四人に「お前ら、それでも現役兵か。歩けない奴は置いていくぞ」と気合いを入れていました。

午後になって突然、日本兵二人と出会うことが出来ましたが、彼らの不確実な情報によると、寧安や東京城とんきんじょうはソ連軍が既に制圧して入れないようです。伍長が朝鮮に行けば何とかなるだろうと言うと、誰も反対しませんでした。何がいいのか、何がどうなるのか、誰も分かりませんでした。

〈母と子〉

翌日、二人の女性と二人の幼子が林の中に立っているのに出くわしました。襤褸ぼろを着て、裸足同然で立ち竦んだ姿

は幻のようでした。「大丈夫か？」と声をかけると、東寧から逃げてきたという。私は愕然とした。

—まさか—

あんな遠くから。

—どうやって—

女性は、小さい子二人は殺してきたと言いました。なんということを、と私は驚いて目を見張りました。「何か食べるものはないですか」と言われても、私たちにも食糧は何もなかったのですが、たまたま、上等兵の水筒に蜂蜜を取った時の残りが少しあるかも知れないと思いました。水筒を逆さにしても出ませんでした。子供は水筒の口をいつまでも舐めていました。その姿があまりにも痛々しく、悲しみのやり場ありませんでした。

〈白系ロシアの子供〉

山道の下りで立ち止まりました。最初は大きな人形が捨てられていると思ったのですが、よく見るとロシア人の男の子が死んでいました。四歳くらいでしょうか、さっぱりした服を着て、顔立ちもよく可愛らしい。

私はびっくりして足を止めました。怪我らしいものではなく、今にも立ち上がりそうでした。

—なぜ、誰がこんなところに—

—と思い、近寄って上から見下ろしました。霧が流れ始めた山中に、独りで深く眠り続けるとしかいえないようなこの子に、どんな物語があったのでしょうか。

この子は白系ロシア人の子ではないのか。ロシアの革命を嫌って満州の地に逃避した白系ロシア人は、今度のソ連軍の侵攻で満州が安住の地ではなくなり、ソ連から再び厳しい弾圧を受けるのではないか。白系ロシア人の家庭に迫

る新しい恐怖が、この子にも及んだのではなければよいが。近くに白系ロシア人の集落があるのではないだろうか。私はこの子の傍らに立ち尽くして、幸せを祈ることしか出来ませんでした。

〈現地の部落民〉

薄暗い木立の中に、小屋のような「満人」の家がポツンと一軒ありました。老夫婦らしい二人が警戒した態度と反抗的な眼で、こちらを見据えていました。「我々は何もしない。安心しろ」と伍長が言い、「今晚、泊めてくれ」と頼みましたが、「満人」は石のように動きません。私たちはもう何日も屋根付きの場所で休んだことがないので、さつさと勝手に草を敷いて土間に腰を下ろしてしまいました。

女性が立ち上がって窯の方に行きました。小さな容器の蓋がずれ、白い泡が零れました。私は生唾を呑み込みました。

しばらくすると、彼女は煮えた汁を少しずつ容器に注ぎ、黙って私たちの前に差し出しました。思わず「謝々」と言って顔を見合わせました。老女の黒光りした顔に、微かな表情の変化を見たように思いました。

〈日本軍の兵器隠匿〉

二、三日経って山から平地へ下りてきて、初めて部落を見つけました。屯長が倉庫に案内するということでいいきました。驚いたことに、日本軍の武器が山のように詰め込んであります。小銃、機関銃、弾薬、手榴弾などが一杯あり、中にはソ連軍の自動小銃さえありました。

ある部隊が武器をそっくり置いて、誰にも渡すなど言い置いて行つたと説明されました。こんなに沢山の武器があ

るのに、なぜ戦わないのだろうか。それにしても、彼らはどこへ行ってしまったのか。

私たちは屯長の家に戻りましたが、ふと気が付くと奥の部屋の片隅に日本人の避難民がいました。女性だけで数名固まって、ひっそりと隠れていました。ひどい着のみのまま、後ろを向いたまま顔を見せようとしません。「どこの開拓団なの？」と尋ねても、一言も口をきこうとしませんでした。近寄っても後ろを向いて、うずくまったままでした。信頼を裏切った軍に背を向けていると思わない訳にはいられませんでした。

〈ソ連兵との鉢合わせ〉

少し大きな部落に泊った時でした。朝、出発しようと銃を手にして軒先を出た時、突然裏門から数人のソ連兵が入って来ました。鉄兜に自動小銃、そして長い足が眼前に現れたのです。二十メートルの近さでした。「来た！」。ソ連兵はこちらにゆっくり歩いて来ます。落ち着き払って、しかし慎重な足取りで進んで来ました。私は軒下の柱に身を寄せて、銃を持ち上げました。敵は立ち止まり、じっとこちらの様子をうかがっています。一触即発の危機でした。敵は足を止め、間を取っています。私が銃をそろそろと持ち上げると、敵も自動小銃を向けて来ました。私が構えると相手も構えるのです。私の手の動きをじっと見ていて、それに合わせていました。緊張の瞬間です。「引け！」。伍長の声に合わせて、私は敵の目を注視したまま、後ずさりして、民家の角を曲がり一気に表門を目指して走った。途中で後ろを振り返りましたが、敵は道の真ん中に立ったまま追っては来ませんでした。

敵も味方も、何となく殺し合いの雰囲気から変わったようでした。こちらから攻撃しなければ、相手も戦いに出ることがなくなったようでした。

〈日本敗北の噂〉

私たちは山の下り道を歩いていました。道幅もいくらか広くなり、側溝には水が流れていました。暑い日差しに、沢山の巻雲が高く浮かんでいました。

山を出てからは何度も「満人」の家に泊まりました。武器を持った日本兵だから仕方なかったのかもしれませんが、朝鮮系「満人」は皆親切でした。「満人」に助けられたという思いは長く残っています。

ところが、ある部落で会った少年が、「日本軍はソ連軍に負けた。日本兵は次々に逮捕されている」と言いました。しかし、他の「満人」からは「日本軍がウラジオストクを占領した」という情報が流れてきました。どちらが本当なのでしょう。夜の夕涼みに白い服を着た住民が道に溢れていて、これまでにはなかった平穏な雰囲気でした。

夕暮れが迫る頃、他の部隊の兵が「ソ連軍は日本兵を一括捕獲するため、今日明日中にこの辺りを大がかりで探索するらしい」と語った。住民らしくない「満人」が二、三人近づいて来て、声をひそめて「武器を捨てて降参しなさい。町へ出れば、白いご飯が腹いっぱい食べられます」と言ってきました。これは最後の助言でしたが、どこかに強制的なものをにじませていました。最早、これしかないと言いつ渡されたようである。彼らは一体、何者なのか。丁寧な物腰で注意深く言葉を選んで言っているのがよく分かりました。

〈白いご飯の誘惑〉

白いご飯という言葉は、降伏の一つのきっかけになったと私は思います。安らぎや温かさに飢えた者に、日本の家庭を連想させたのでした。

私たち六人は林の中で向かい合って座りました。もうやるだけのことはやった。これで終わりだという思いがあり

ました。「明日、武器を捨てよう」と思い切ったように伍長が言いました。六人が自主的に武装解除を決意した瞬間でした。特別の悲壮感もなく、むしろここまでの苦難に耐えたことを是認するのです。

翌朝は霜が深く立ち込めていましたが、部落前が一番高く目立つ場所に各自が手榴弾、小銃、弾薬、帯剣などを置きました。あとは背負袋と雑囊を残すだけとなりました。

私たちは前日の「満人」の言葉を信じ、二時間以上も待ちましたが、誰も現れません。私たちとしては命に代えても大事にすべきものとしてきた武器ですが、今となつては環境や条件の変化でなるべくしてなつた自主的な武装解除でありました。

南の方を見ると三キロくらい先に天橋嶺^{てんきょうりょう}の町が見えました。天橋嶺の町には木材の工場があり、満鉄も走っています。私たちが武装解除したこともどこからか見ていて、知ったはずです。そして降伏した私たちに白いご飯が用意されているのかも知れません。何かいいことが待っているような感じがしました。武器を捨てた私たちに危害を加えることはないでしょう。私たちは何の不安もなく天橋嶺に向けて歩き始めました。

天橋嶺の町外れには大きな開拓団の建物がありました。元々日本人の開拓団でしたが、今では地元の「満人」のものになっています。裏に小学校だった建物があり、私たちに貸してくれました。教室らしい板の間に、久し振りに靴を脱いで横になると安心感が出て、深い眠りに落ちていきました。

〈土匪〉の襲来

翌朝、土壁の外で何やら叫ぶ大声がして、慌ただしく人の駆ける足音がします。ただならぬことが起きたようです。「日本兵は出ていけと言っている」と誰かが言いました。安心しきっていたところで、不測の事態が生まれました。

門を出ると、二、三十人の「満人」が待っていたように威嚇し、石を投げ棒を振り回して叫ぶので、やむなく土堤に逃げました。その他かい鉄道路線の向こう側にも大勢の「満人」が待ち構えていて、私たちは逃げ場を失いました。突然、線路の両側から一斉に銃撃が始まりました。「危ない!」「伏せろ、伏せろ」。しかし身を隠すものはありません。あるのはレールだけです。やむなく私はレールの間に腹這いになりました。約十五センチの高さがある満鉄のレールで、体を遮蔽しきれぬのか。カチン、カチンと、レールが小銃弾を弾きます。

私はいきなり背中を何か硬いもので嫌というほど叩かれました。そして大きな靴らしいものが顔の目の前を塞ぎました。「立て!」と傲然とした髭だらけの大男が怒鳴ります。彼らは普通の「満人」ではなく「土匪」でした。「行け!」と顎でしやる先には満鉄のレールが遠く続いていました。

その間、小野寺伍長が銃で射たれ、倒れました。私たちが駆けつけると、上衣のボタンの間から血が流れています。急いでボタンを外してみると、「あつ!」と声をあげるほど、上衣の中は血の海でした。かつて指揮班にいた伍長は拳銃を所持していて、武装解除後も拳銃だけは手放さなかつたのです。「土匪」はそれを欲しがって寄越せと迫ったようでしたが、簡単には渡さない伍長の態度に怒ったようです。

この先に日本軍の医療班がいるから早く連れていけ!というので、急ごしらえの担架を作り、みんなで運びましたが、そこでは手当をするので伍長を置いていけと言われました。

伍長には十分な治療が必要です。これまで世話になった伍長と別れるのは本当に辛いことでしたが、置いて行くことにしました。伍長は果たして生きていたのでしょうか。

〈ソ連軍の捕虜〉

私たちが医療班と打合せをするのを、何時のまにか現れたソ連兵が見ていました。若くて長身、長い脚、屈託のない大きな声。「ダバイー」、それが私たちに呼びかけた最初の言葉でした。その時、私たちは初めてソ連軍の捕虜になったと実感したのです。また、大勢の日本兵の中からロシア語の分かる者を選び通訳としており、「さあ、『行くぞ』と言っていますから」と彼は早速与えられた役割を果していました。

翌日、^{おぎせ}汪精に着きました。元の小学校跡に連行された時、日本兵は三十人くらいに増えていました。久しぶりに大きな焚火を囲んで暖を取り、その横で鍋に米を煮て握り飯を作りました。そこにソ連の将校が堂々とした態度でやって来て、捕虜の間に割って入りました。ニコニコ顔で握り飯を見ると「オウ！」と驚きの声を出し、両手で丸い形を作り、「これは大砲の弾丸だ」と大げさな真似をしたのです。日本兵の輪の中に、すっかり溶け込んだ風でした。それは敵も味方もない人間同士の姿でした。

しかし、翌日になると彼らは私たち捕虜を全員校庭に出して一人ひとり身体検査を始めました。武器の所持検査は当然ですが、日本人なら誰でも持っている腕時計や万年筆、ライターなどを極端に欲しがりました。一人ずつ帽子を裏返し、上衣や袴下はもちろん、靴まで脱がせて念入りに検査したのです。

私は腕時計を靴下の先に隠し、平然とした態度に努めていましたが、ロシア兵は靴下も脱げと言い、たちまち見つかってしまいました。父の愛用した、思い出のロンジン製でした。「こんな野郎に取られてたまるか」と思うや私は夢中でソ連兵の腕に組みつきました。相手は驚いて何か叫びながら、もみ合いになりました。「やめろ無駄だ」「射たれるぞ」と周りの者が列を崩して騒ぎます。別のソ連兵が駆けつけて、私を思い切り突き飛ばしました。仰向けにひっくり返った私は激しい怒りと憎しみで相手を睨みつけました。

腕時計を奪い取られたことは、父との間が切り離されたような感じがしました。ロンジンは父との思いでの全てを刻む証でした。私は本当にがっかりしました。霧が湧くように悲しみが私を包んだのでした。

次に資料①⑨「開拓団との出会い」を見て下さい。

私たちは、やっと延吉えんきちの町に近づきました。苦難の末、どうにか歩き通したのです。

延吉の街は四方が丘に囲まれ、薄い墨絵のような雲が浮かんでいました。そして、道の両側に細い木が風に揺らいでいました。

急に「兵隊さん」と呼ぶ甲高い声がありました。気が付くと、一般邦人が二百名以上も集まりこちらを見つめています。開拓団の婦女子が多いようでしたが、おそらく遠くから何日も歩き通して来たに違いありません。現地人の報復やソ連兵の執拗な略奪暴行に耐え、辛うじてここまでたどり着いたのでしょう。誰かが「兵隊さん、助けて」と呼ぶと、何十人もの女性や子供がせきを切ったように「兵隊さん、兵隊さん、助けて下さい」と泣きながら訴えた。女性は髪を切り、煤を顔に塗り、泥だらけの格好をしています。裸同然の子供も何人か混じっていました。数人が道の真ん中に飛び出し、ソ連軍の警護兵がこの大きな動揺を慌てて制止しようとしています。「ネルジャー（駄目だ）」と大声でわめきながら、泣き叫ぶ二、三人の女性を引き倒し、押し戻そうとしました。「ストーリー（止まれ）」「テルウォッチ、ダバイ、イジスター（通訳、来い）」。

しかし、彼女たちはソ連兵の前を通り抜けてもこっちに来ようとしません。「兵隊さんはどこに行くの」「助けて」と泣き崩れた。捕虜の私たちも「どこから来たの?」「どこの開拓団?」と返します。彼女たちを両手で受け止めてやりたい。慰めてやりたい。話を聴いてやりたい。

警護兵が自動小銃を空に向けてバリバリと発射して威嚇し、こっちにも銃口を向けて何か言っています。ソ連兵の顔は怒りと恐怖の極限で、何をするかわかりません。恐ろしい形相です。彼女たちもおびえて立ち竦みました。兵の中から、「頑張れ!」「死ぬんじゃないぞ!」と叫ぶ者もいました。偶然に出会った日本人同士の兵と民衆。離れがたい一時の沈黙に、辛い悲しみの渦が流れた。

ソ連侵攻と同時に、軍は軍人家族を優先的に後方へ護送し、汽車で逃げたらしいが、開拓団や一般邦人のほとんどは、どこからの助けもなく、着の身着のままに逃げたのでした。産児の死体を抱え半狂乱の母親、ソ連兵に犯される若い女性、大勢の集団自決、我が子の首を絞め、見知らぬ野に置いてきた人、娘を川に投げ捨てられた母親：類例のない大惨事であったことを私たちが知ったのは、何年も経って無事に生きて日本へ帰ることが出来てからのことでした。

私たちが坂道を振り返ると、彼女たちは右折して黙々と連行されていくのが見えました。捕虜の身とはいえ、どうにもならない自分がかくしく、涙が流れました。西の行く手には真っ赤な太陽が沈みかけていました。空も雲も民家も畑も赤く染めた延吉のあの夕焼けは、間に合わせの国策に踊らされた国民の血の涙であったといえるのでしょうか。

次に資料②③「延吉からクラスキーへ」に入ります。

私たちは延吉にあった歩兵連隊跡の兵舎に一時的に収容されました。兵舎は既に収容されていた捕虜で一杯でしたが、後から後から捕虜が連行されてきて、最も多い時には四万五千人も収容されていました。

特に戦闘の末、長い移動をして逮捕された兵たちは疲労困憊し、ボロボロになっていました。お互いにどこの部隊かは知りません。階級もわかりません。見ず知らずの群衆だったのです。お互いに示し合わせて勝手に階級章を変え

ている者もいました。体格が大きいとか、ドスが利く声だというだけで下士官の階級章に偽装し、威張り散らす者もいました。お互いに好き勝手な集団になっていたのです。

九月も下旬になり、冷たい雨が降り始めました。寒さも日増しに強まります。私たちは空地に張られた八錐形天幕に詰め込まれており、他人の荷物を踏みながら出入りするしかありませんでした。私のわずかな荷物も毎日のように踏まれるうちに、入れておいた大事なシガレットホルダーも真ん中から折れてしまいました。

これは、前年の初夏の頃、銀座の松坂屋で上の姉が私に買ってくれたものです。松坂屋の南の入口を入ったところに陳列してありました。煙草を差し込む火皿は赤味の塗りをした木製で、吸口は黒のエボナイトです。私には上等な品でした。「これにしましょう。近いうちに軍隊に入るのだから、これがいい」。上の姉は明るく、言い聞かせるように言いました。そのシガレットホルダーは今の私にとっては上の姉との唯一のともしな繋です。姉らしさや、銀座の街を確かめさせる大事な品です。

それが折れ、砕けてしまったのです。

—あつ、もう終わりだ—

日本から持参した物はこれだけだったのに。

—もう、どうでもいい—

と思いつつ、諦めきれぬ無念さで一杯でした。延吉の八錐形天幕の中で、自分が誕生日を迎えて二十歳になったことも忘れていました。

数日経った時、ソ連側から「捕虜を日本に帰すことになった」と発表がありました。いよいよ日本に帰ることが出来る。収容所の中は感動で沸き返りました。千名単位の大隊を編成して出発するという事で、私は三十五大隊にな

りました。

重い病人などもいて、あつちだこつちだとやりくりに時間がかかります。誰がどの隊に行ったのか分かりません。「ソ連側がわざとやっている」「親しい者同士の縁を切るためだ」と言う者もありました。私の追撃第十三大隊の五人はバラバラになりました。以後、彼らと顔を合わせたのは日本に帰ってから二十年も経ってからでした。

ソ連側からは「この延吉からソ連領のクラスキーまで徒歩で行き、そこから汽車でウラジオストクへ行き、日本の船に乗ることになる」と言われました。

クラスキーまでは二百五十キロ以上もありましたが、そこまで行けば後は汽車で、その後は大きな船に乗れます。もう少し、もう少しの辛抱だと思いました。それだけの体力はもう残っていないという絶望に近い気持ちと、日本へ帰れるのだからという望み。その葛藤が絶えず頭から離れませんでした。

九月の末頃、やっと私たちも出発する番になりました。「トウキョウ・ダモイ（東京へ帰るのだ）」という誘惑が気持ちを持ち動かします。「ダバイ・パイジョン（さあ行こう）」。隊の中にいる、病人で今にも倒れそうな日本兵にも、ソ連兵は「ダバイ・ダバイ・イジスター（進め）」と声を掛けました。道端には現地の「満人」が沢山いて、捕虜の列を見ていました。昨日までの支配者だった日本兵の見る影もない姿に驚き騒いでいます。「馬鹿野郎！」と満人が私たちに向かって大声を出しました。日本人から長い間、浴びせかけられたその言葉を、立場が変わった彼らから投げつけられたのです。「小休止！」と伝えられると、誰もがその場に倒れ込み仰向けになりました。足の感覚はどうに失っています。何か飲みたい。何でもいいから食いたい。少しでも長く寝たいと哀願します。怪我をしている者の患部には蛆がわき、巻いた布きれの上にも這い出してきました。

道端に畑がありました。その中に飛び込んで生の芋をかじる者が出ると、何人も後に続きました。「満人」が捕虜

を追いかう叫び声をあげます。その横でかがんだまま、長い下痢便をする者もいました。

狭くほこりだらけの悪路に倒れている捕虜に向けて、米国のスチュードベーカー製の大型軍用トラックが荒々しくクラクションを鳴らし、道を開けさせようとします。砂ほこりを朦々と巻き上げて通り過ぎるのです。山ほど積んだ荷物の上に、二、三人のソ連兵が軍歌を歌っていました。

時々、冷たい秋雨が降りました。雨を避けるものではなく、濡れるにまかせるしかありません。道端に野宿する夜が続き、落伍者も増えました。

千人の群は満州と朝鮮北部とソ連の領土が接近した国境線添いに、山間の田舎道を上り下りしながら十日以上もかかって、やっと峠を越え、ソ連領に入りました。振り返ると、満州の山々が果てしなく広がっていました。多くの苦難と傷ついた体験が重なり、冷えた風が体にこたえました。国境には小さな検問所があり、数名のソ連兵が遮断機を上げ下げしています。「ダバイ、ハジー（行け）」。そのまま峠を下り、ソ連で最初の町に着きました。

クラスキーノというその町には、先着した捕虜の群が無数に野宿していました。ポシエト湾を囲むように何万という捕虜が隙間なく野宿しています。草むらと灌木の上に天幕もなく、完全な野ざらしです。

早速、ソ連兵に尋ねました。「カクダー・ダモイ（いつ帰国するのか）。しかし、彼らにも分からないようです。「ヤー・ニズナユ（知らない）」「スコーラ・ダモイ（近いうちだ）」としか返事できなかったのです。

私たちは何か腹に入れる物を見つけたくて血眼になりました。烏を捕った者がいたので、拝み倒して少し分けてもらいましたが、パサパサした肉でうまくありません。しかし蛙は捕えて何度か食べました。

次に、資料②「非人間的貨車輸送」をご覧ください。

クラスキーノへ来て一週間も経ったある日、ダモイ（帰国）だという声が伝わってきました。ここから汽車に乗ってウラジオストクへ行き、そこから日本の船で帰るのです。私は胸が弾みました。

原っぱで私たちを待っていたのは、長い貨物列車でした。目前の箱型貨車は日本の貨車の倍どころではありません。二十トン貨車に見慣れた私には、優に五十トン以上はありそうです。床は高く、体力がなくなつた自分一人では上れないのです。

貨車の中は雑多な悪臭に満ち、塵が散乱して汚い。天井に近いところに鉄格子をはめた三十センチ四方くらいの窓が一つある。また、奥の床には十五センチ角の穴が一つ空いていた。電灯も暖房もなく、奥深い箱といった感じでした。

ひんやりした鉄の箱に入つた私は、思わず身震いしました。貨車には五十人ずつ乗りましたが、ゆつたりと横になるゆとりはありませんでした。

日本人の通訳は相変わらず忙しく走り回っていました。人員は確保されているか、重病人はいないか、勝手に貨車から離れないようになどと、車両ごとに扉口から声をかけてまわっていました。

突然、何の前触れもなく、貨車の扉がドシンという重たい音とともに閉じられました。外でソ連兵二、三人が頑丈な鉄の引戸を閉めたらしく、そしてあつという間に施錠されたのです。私たちは皆、あつけにとられました。

―何のためにそこまでするのか―

と思いましたが、しばらくすると何の予告もなく、ゆつくりと動き始めました。出発とも発車とも全く予告なく、のろのろと動き出しました。

シベリアの景色は、満州の興凱湖畔で見た時とはだいぶ違っていました。山の少ないシベリアは、緩い斜面の丘、

黒々とした木立の原野、細い白樺の林、これらが果てしなく続く大地でした。日陰を落とした長い長い貨物列車は地平線の端から端へと走っていました。原野の中に停車して半日も動かないこともありました。

十月も中旬を過ぎて、既に冬が訪れていました。貨車の中はものすごく寒く、扉の隙間風や窓から入る風も氷のように冷たい。下痢をしている者も多く、床の隅の小さな穴だけでは間に合いません。何人もが穴の近くで漏らしてしまいます。悪臭が籠って耐えられません。警戒兵に知らせようとしても連絡が取れないのです。

クラスキーノを発車してから幾日も経たのに、通訳が来てとんでもないことを言いました。「ウラジオストックは船の準備が間に合わないの、ニコライエフスクでの乗船に変更するらしいです」。準備が間に合わないとは一体どういう意味なのか呑み込めません。通訳も困って「ソ連側もよく分らないようですが、そういう指令が中央の方から来たそうです。ニコライエフスクというのは北樺太の向い側にあつて、日本に一番近い港です」と言いました。「後で、もつと詳しい説明があるかもしれませんが」と言つて、通訳は伝達のため、足早に次の貨車の方に行つてしまいました。が、貨車の中は騒然となりました。「いつたい、何をやっているんだ」「通訳の言うことを信じていいのか」。怒りと落胆が一度に来ました。早く帰らないと厳しい寒さが日増しに募ってきます。

貨車の外では、警戒兵の大きな声がします。「ノ・ヤボンスキー・スコーラ・ダモイ（日本兵は間もなく帰るのだから）」どうせ帰るんだから、そのくらいはかまわないだろうと言っているようです。

それから一週間も経った時、例によつて貨車はゆるゆると停車しました。ところが外で今までにない多数の兵の声がしました。命令したり報告したり、厳しい雰囲気です。扉が開くと三、四人のソ連兵が自動小銃を肩に立っていました。「ダバイ・シュダー・スピエシウー（早くこっちへ来い）」。聞きなれぬ命令調だ。その時、近くからボ・ボ・ボーと汽笛が聞こえて来ました。途端に、「船だ！港があるぞ！」とうれしくて我先にと下車しました。私は足の力が抜

けてふらつと来ます。「ダバイ・ブイストレー（早くしろ）」。ソ連兵はこれまでになく急ぎました。私たちの貨車は草原の引込線に停車していました。遠くに沢山の建物が見えます。

「ダバイ・シユダー（こっちへ来い）」。ソ連兵が草の原つばや炭殻の捨て場などの上を引率して行く後を、私たちはやつとついて歩きました。「汽笛を聞いたか。船が待っている」捕虜の中から励ましの声が出ます。

―港へ行くんだ。もう少しの辛抱だ―

私も自分を励まします。まずは船に乗ってからのことです。左足が何か所も傷で膿んでいました。戦場で受けた傷です。私は足を引きずりながら歩きました。

四キロ近く歩いた時、ある戸惑いを感じました。私たちは大きな建物の前に来ました。粗末な数棟の平屋を囲む鉄条網。角には望楼が立ち、自動小銃を持ったソ連兵がいます。門の両側では十人程のソ連兵が、じつとこちらに注目しています。まるで刑務所のようにでした。

―これはいつたい、何だ？―

今までとは様子がだいぶ違います。「ダバイ・ブイストレーエ・イジスダー（早くこっちに来い）」。急かすソ連兵の大声がします。容赦なく門の中へ入れてしまおうとする空気を感じながら、何となく押されるように中へ進んでしまいました。全部が中へ入るとソ連兵は急いで門を閉め、鍵をかけました。ガチャンという鉄の音を聞いた時、私は初めて新たな拘束の疑念を感じたのです。

中には細長い平屋がいくつもあって、日本兵が沢山いました。私たちは指示された二列目の建物に入りました。

そこは、外側の漆喰が崩れかけた廢屋でした。倉庫か厩舎に使った建物のです。中は薄暗く、木材などが転がったままです。電灯は壊れていて、暖炉ベィチカの煉瓦は火格子もなくなっていて、とにかく猛烈に寒かった。左足は上の付け

根まで膿んで座れません。

ここで資料②②「絶望」をご覧ください。

暗い入口から幹部らしい人が入って来ました。「みんないるか」。暗い奥の方に向かって、急がずに言いました。

「ここは、ニコライエフスクではない。コムソモリスクという町である。日本兵を帰国させることは当分行われぬ」。続いて「ここは日本兵の捕虜収容所である。今後君たちは労働に服務することになる。詳しくはその都度伝達するからよく守ること。ただし、脱走は許されない。射殺される危険があるから厳に注意して欲しい」と、大体このような話をしただけでさっと姿を消しました。

「何だと?」。あまりの衝撃の大きさに言葉も出ません。延吉では「捕虜は日本へ帰す」と約束したではないか。――だからおとなしくここまで来たのに――

その時、外で用を足した者が戻ってきて言いました。「大変だ!ソ連に大打撃を与えたドイツの捕虜には無期の強制労働を、また短期ながら交戦した日本の捕虜には二十年の強制労働を課すそうだ。帰国の話はなくなった」。そして、「向こうの隊では大騒ぎになっている」と付け足したのです。

はつきりした情報のない私たちは、何が何だか分かりません。デマか本当か。一体、誰が決めたのか。何故なのか。かろうじて極寒に耐える私たちの最後の望みの火は、一瞬で吹き消されました。「本当に、そうなのか」。戦争が終わって当然日本に帰れると思っていた日本兵捕虜は、こともなくシベリア各地に送り込まれるのです。

だからといって私たちは、武器はない、体力は全くない、仲間もバラバラ、地理も分からない、ロシア語も出来ない、食料もない、防寒具もない。私たちは逃げることも出来ないのです。

—もう駄目だ—

望みも夢も凍えて、沈黙の闇が長い時間を刻んでいました。怒り、悲しみのどん底に落ちていったのです。それは昭和二十年十月二十二日の夜のことでした。

「ダバイ・ウハジー（外へ出ろ）。ソ連兵が入口から中に向かって大声を上げました。外は朝六時になっていました。彼らは人員の点呼をするのですが、何度やっても人数が足りない。

十人ばかり中に入って探したところ、六人が自殺していました。自殺を考えたのは彼らだけではないでしょう。帰る日を予想することもできない過酷さの中から、今、飛び出したい。幸せをもう一度つかむため、ダモイするのだ。頭に描いた幸せの脚本を、何度も繰り返し思い浮かべたのだろう。温もりが欲しい。何か食べたい。それから、ゆっくりと眠りたかったのだろう。

次に、資料②③「シベリアの強制抑留所」をご覧ください。

この地図をご覧くださいただればわかりますが、日本軍人はシベリアだけでなく、ロシア全土にわたり、約二千ヶ所に収容されました。東は沿海州から西のモスクワ、北はノリリスクまで約六十万が捕虜として強制的に使役労働をさせられたのです。

スターリンはかねてより、ロシア革命の混乱に乗じた日本のロシア出兵を恨み、屈辱を晴らしたいと思っていたようです。更に今度は戦後経済の復興が急務となり、新たな労働力が必要となりました。これが元となって、日本の捕虜を労働使役に使うことになったのでしょう。

次、資料②④「コムソモリスク第二収容所」をご覧ください。

この写真は最近のもので、しかし外部の板を張り巡らした様子などはだいぶ当時の雰囲気を残しています。今は刑務所になっているため、近づくと嫌がられます。中から塀の二メートルくらいの手前に鉄条網が張られています。

当時、私は第三大隊に入れられました。白川軍曹という、長身の温厚な中年の香川県人の歩兵部隊の中に入れられました。彼は莫^こ蔭^ぎのような大きな敷物を板の上に敷き、私にも座れと言ってくれました。

間もなく、捕虜に冬の衣服が支給されました。耳カバー付の防寒帽、外套、防寒靴、ズボン、肌着、毛布一枚などです。もちろん相当にひどい物で、満州から運んできた日本軍の使い古しでした。

続いて、資料②⑤「シベリア強制抑留の三重苦」に入ります。

〈酷寒〉

シベリア抑留の三重苦と言われたのが、酷寒・飢餓・強制労働です。白川班は冬服が支給されると、早速町へ引率されて土掘りを命じられました。

これは、道路に沿って深さ二、三メートルの側溝を掘り進める仕事です。おそらく水道管などの埋設用と思われるます。古いツルハシと薄い鉄板が付いただけのシャベルが配られました。シャベルは日本のように足をかけて踏ん張るところもないし、握りの部分もないので力が入りません。道具は他に二メートルもありそうな鉄のバールだけです。

まず、現場監督のロシア人が作業をやって見せます。私たちは指示通りにやってみましたが、硬く凍った土はツルハシもバールも全く受け付けません。バールはかなり重いもので、両手で持ち上げるのもやっとなのですが、力一杯に振

り下ろしても粉のような土屑が散るだけで跳ね返されてしまいます。「ダバイ・ダバイ（さあ、やれ）」と強制されても同じです。

朝は、十時近くによりやく薄明るくなります。息が睫毛を凍りつかせ、うまく離れません。鼻毛も凍り、頬がヒリヒリ痛みます。冷え込みの厳しさには声も出ませんでした。体力がなくなっているのでボール自体が重くて持ち上がりません。悪化した左足は蜂の巣の中かと思われるほど、めちゃくちゃに刺されたような痛みが続きました。

私は意識が薄れて来ました。寒さの中に立ちつくすのがやつになりました。辛うじて立ちつくす中で、あらゆることが負担になりました。特に時間の経過を意識することは苦しみを増大させました。

馬鹿のように立っていることだけに努めることが必要でした。自分は馬鹿になり、ただ生きているだけにならねばならない。一時間でも二時間でも、襟を立て、風上に背を向け、背中を丸めて立っているだけです。極寒にやつと耐えながら、作業の終わる時間が来るのを待つつらさは、時間を忘れる自分になるための厳しい試練でした。

「ダバイ・ラポート（働け）。警備兵も一緒になって「ダバイ、ダバイ」といくら叱咤しても、立ちつくすしかありませんでした。寒さには慣れているはずの彼らも銃を持ったまま、足踏みを続けてやつと耐えていた。

穴の中が暗くて見えなくなる頃、重い夜空に鈍い汽笛が鳴り響きます。私たちがこの町へ到着した時、船と錯覚したあの汽笛です。一日の労働がやつと終わる知らせでした。

収容所の入口まで私たちを送ってきた現場監督が警戒兵に何か早口で話をしていました。捕虜がさっぱり動かないと言いつけているようでした。

十二月に入ると、零下四十度の日が何回ありました。収容所の宿舍の入口は、ドアが二重になっていましたが、人の出入りが多く、水をこぼしてそれが凍りついたりして、ドアがきっちり閉まりません。ドアの隙間から、外の寒

気が白い濃霧となって吹き込んで来ます。入口付近のベッドの者はとてもたまらない。よく怒鳴っていたものでした。その頃、慢性下痢に苦しんだ捕虜が多数いました。夜中に下腹が痛む。我慢できず、零下二十度、三十度、それ以上の極寒でも便所に行かざるを得ません。大きくはれ上がり、棒のように硬くなった左足を引きずりながら、私は便所と決められた空地に走りしました。極寒時に土を掘って穴を作ることとは出来ないのです、空地を区切り便所と定めたのです。

そこは人糞だらけで足の踏み場もない原っぱでした。曲がらない左膝をいくらかでも曲げてしゃがみます。私は赤痢になっていたのです、一晩に何回も便所に走りました。本当に命がけでした。

便所では、使うちり紙が不足していました。ない時は服の裏地を小さく破いても使ったのです。防寒服は凍死を防ぐ大事なもののだが、それさえ破って使わざるを得なかったのです。

〈飢餓〉

ヨーロッパ戦線ではウクライナをはじめ穀倉地帯を焼かれる被害を受け、ソ連は自国の軍や国民に食糧を支給するのも精一杯でしたから、捕虜にまわす余裕はなかったのです。それだけにソ連の収容所における処遇は非人道的なものになりがちでした。満州から略奪した分も一部は横流しされたくらいです。

日本人の捕虜に対してはパンが一日当たり三百グラム^{カシヤ}。粥は飯盒の三分の一程度しかありませんでした。そのため、捕虜同士の食事の分配は特に厳密に、公平さが求められました。パンの分配は殊更の工夫が必要で、一ミリの差異でも納得しなければ許されませんでした。とにかく、「もっと食いたい」という食への願望は異常なまでに強かったです。

ソ連の市民も、捕虜が何をどれだけ食べているのかは大きな関心事でした。昼休みに外で食事をしていると、ロシア人が近寄って「アビエド・ハラシヨー?（飯はうまいか?）」と覗き込むのです。

―一度でいいから腹一杯食いたい―

―一度でいいから黒パン一本を食ってみたい―

と誰もが切なく思い続けたのです。それから日本の内地のことを思い出すのが常でした。

次に、資料²⁶「強制労働」に入りましょう。

〈強制労働〉

十月下旬にコムソモリスクに到着してから、私たちは「ダバイ・ラポート（働け）」と当然のように労働を強制され続けました。体力は最も弱り、寒さと飢餓が重なって苦しみ抜いたのです。

しかし、半年も経って少し落ち着きを求め始めた頃から、新しい反軍・階級意識に目覚め、青年部を中心とした運動を体験したのです。そして、それから帰国までの一年は自主的な改革運動の推進を実践する中で、様々なアクチーブ活動を柱とした文化的な組織づくりや労働の理論を体験的に学習しました。

それは、シベリアの悪条件のもとに行われた強制労働であって、憎むべきものであり、個人的にも人生の取り返しのつかぬハンディを作ってしまったのです。

しかし、視点を変えて言うなら、戦後の日本の思想的解放の波にも乗り遅れることなく、理解出来るだけの素地を作ったものとも言えるのではないのでしょうか。

いろいろな体験は、「鉄条網の中の民主主義に過ぎなかった」と言えるかも知れませんが、「初々しい初期民主主義」とも言えるでしょうが、六十万の日本人がこの土地で社会主義的な体験をしたという事実は無視できないでしょう。

さて、資料⑦「想像を絶する苛酷な抑留」に入ります。

シベリア抑留は、三重苦のほかにもいくつかの大問題がありました。まずその一つとして、虱の大発生があります。体も衣服も虱だらけとなったのです。昭和二十年の十一月頃から翌年の三、四月にかけて爆発的に大発生しました。下着類はもちろん、隙間なく付着し、ひどい痒みを起こします。特に夜間は寝ている間にかきむしるので皮膚炎を起こし血を流しますが、それが発疹チフスや回歸熱を媒介して、高熱を出します。

大きい虱を親指の爪で潰すので、飛び散った血が顔についてものすごい形相になりました。夜中には首筋あたりが痒くなり、時には顔の上までも這い上がります。私はやけくそです。首筋を手で撫でて、膨らんだ虱を手のひらで拭くと二、三匹手に残りますので、これを口に入れて、プチプチと歯で潰し、滓をプツと吹き飛ばします。

また、一番過酷なのは情報が全く入らないということでした。日本政府からは私たちに直接何もしてくれないのです。日本は私たちを見限ったのかと思われるほどでした。

「カクダー・ダモイ（いつ帰れる?）」と尋ねても、ソ連側は「ヤー・ニズナーユ（知らない）」と言うだけです。嘘をついているわけではなさそうです。「ニエット・ニポニマーユ（分らない）」。彼らの答えはいつも同じでした。

収容所で最初の冬をなんとか越すために四苦八苦している時、隣接する中央病院は患者で一杯になっていました。私の左足はますます悪化して、もうどうにもなりません。足全体が化膿して丸太のようです。昭和二十一年一月下旬、

ついに中央病院の外科に入院することになりました。

病院では村崎という衛生兵が、ひと目見るなり「このままにすると、左足全体を切断することになるから、膝の辺りを切開して膿を出す」と言って、手術の準備を始めました。病院といっても麻酔薬もメスもろくな薬も、なにもありません。彼は銕を熱湯で煮沸消毒していました。その間に四、五人の衛生兵がベッドの私を取り囲みました。「少し痛い但我慢しろ」、そう言うのと他の者がしつかり手足を抑えつけました。その瞬間「ウワー」と私は絶叫しました。全身が激しく痙攣し、激痛にもだえる私は男たちに力一杯押さえつけられるままでした。膿の噴き出している穴に、銕の先をやにわに突き刺したのです。そして、下着が擦れても飛び上がるほどに痛かった膝の下を、麻酔もなしに銕で切り開いていくのです。身動き出来ぬまま私は絶叫しました。一人の男が私の口の中に手ぬぐいらしきものを押し込みました。衛生兵は膝の肉を大きく切り取って捨てています。「止めろ！」呻く声が個室に響きました。細く切ったガーゼを黄色いリパノール液に浸して、切開した口から中の方へ、何本も詰め込んでいます。私の体はありつたけの緊張で崩れるように感じ、一瞬の錯乱とともに気を失いました。

気が付くと、私は板を打ち付けただけのベッドに寝かされていました。私は左足の激痛に唸り続けるしかありませんでした。七転八倒の苦しみで、痛みに耐えきれず、眠れぬ日ばかりでした。郷里の実家のことも、過ぎた幸せも思い出も、何の役にも立ちませんでした。懐かしい、優しさの過去に助けを求め、祈りにすがっても、痛むだけの自分でした。身悶えすれば、それだけ痛み、痛んでは悶えました。病名は蜂窩織炎と診断されました。

中央病院に入ったら、生きては帰れないという噂がありました。それほど死亡者が多かったのです。この病院での死者は千数百人だったとの記録が残っているようですが、私たち入院者の推定では二千人も人が死んだはずですよ。その大部分は最初の冬に亡くなったものと思われれます。

死者は裸にされて病院の空地に置かれますが、みな凍ってしまいます。零下五十度の世界ですからカチカチに凍ってしまうのです。それをトラックに積んで墓地に運ぶのですが、トラックの荷台に積み上げるゴトン、ゴトンという音が耳に残っています。一方、墓地では土が凍っていますから穴が掘れません。そこで何体かまとめて雪などをかぶせたままにしたのです。

しかし翌年の春になって雪が解け始め、カラスなどが一杯に集まり遺体を突き始めました。そこで初めて大きな穴をいくつも掘って埋め直したのです。遺体を引きずり十人、二十人と埋め替えました。

墓掘りの作業班が夕方帰ってきて、水道小屋の前で自分の手などを洗っていましたが、中には激しく嘔吐する者がいたのを覚えています。

—おれは日本へ帰るぞ。絶対に死なない—

私は、上の姉にきつと帰ると約束した以上、死ぬわけにはいかなかったのです。

続いて、資料②⑧「強制労働の事例」を挙げました。

日本人捕虜に労働を強制して、かねての恨みを晴らし、ソ連の戦後経済復興に役立たせようというのがスターリンの狙いですから、急いで私たちをソ連領内に移送したのです。二千ヶ所に分散させられた六十万の捕虜はそれぞれに苦しい体験をしました。

私はコムソリスクというシベリア開発の最前線を担った都市の住宅や工場の建設、食糧運搬などにもっぱら駆り出されたのですが、労働は本当に厳しいものでした。中には自殺した者もいたのですから。

〈カテゴリー建設〉

二世帯住宅を二十棟建設するのが労働の中心的な作業でした。ソ連人の煉瓦積立工がうまくノルマを達成できるように煉瓦を準備し、モルタルを練り手許へ運ぶのです。手押車グーチャカは大型で重くバランスを取るのが難しい。モルタルは最上質のものをタイミングよく運び上げ、積み手が最も働きやすいように段取るのです。腕も腰もへとへとに疲れて動けないほどでした。

ただ、ここで私は後々の人生において最も大事な数々のことを学び取ることが出来ました。動作分析の原点に気づいたことは極めて大きな収穫でした。ただそれは私が帰国してから何十年後のことでした。

〈ザコツゼルノー糧秣倉庫〉

ここでは荷降ろしを行いました。この作業は流れ作業として繋がっていたので、みんなが一斉に作業を始めなければなりません。誰一人手を休めることは出来ないのです。疲れたと休めばたちどころにライ麦の山に埋まってしまいます。大変危険な重労働でした。夜間作業で朝までにやり終わらなければなりません。朝になるとまた次の貨車が到着して、バラ積みのライ麦を荷降ろしするのです。

資料②⑨「強制労働の事例」

〈アムールスターの溶鉱炉修理〉

アムールスターはシベリアで有名な大工場でした。ある時、突然内部耐火煉瓦が破損しました。必死の復旧作業に

日本人捕虜も参加しましたが、敵も味方もないような緊急で一体感のある大作業でした。その時の記録が同工場に今でも残っているのですが、私としては少し誇りにも思うところです。

〈アムール河の糧秣荷揚げ〉

これは、河から上がる糧秣の臨時作業でした。現場監督ポポフと警戒兵が結託して、捕虜を余計に働かせようとなりました。裏の事情はよく分りませんでしたが、普通よりも「ダバイ・ダバイ」と私たちへの督促が過酷でした。この荷物を全部運び出すまでは帰さないと頭から言い渡し、自動小銃をガチャガチャさせました。何となく嫌な奴でした。そこで一計を案じて、糧秣袋を一人当たり百袋荷揚げしたら帰してくれないか、と申し入れました。請負作業の提案です。ポポフはびつくりして返答に窮しましたが、結局は「モージナ（よからう）」と言われた。私たちは歯を食いしばり、全身脂汗にまみれて定刻より早めに終了した。^{カンチャイ}来る日も来る日も、本当に苦しい毎日でした。

次に資料③〇「捕虜の埋葬地」です。

あれから七十年以上も経ちました。気も遠くなるような歳月です。広大な名も知らぬ大地に裸にされて遺棄された捕虜たち。運命に翻弄された日本軍の捕虜たち。彼らはこの大戦争の責任を押し付けられたかのようです。犠牲になる恐ろしさには立ちすくむばかりです。

中央病院で死亡した人たちは、二千人にもなるでしょうか。この写真は、彼らが遺棄されていた場所の今の写真です。広さは百メートル四方もあるのか、判然としませんでした。自然に生えた木や草にまかせ、足元も定かではありません。ただ大きな窪みがあちこちにあり、それが墓穴かと思われるのです。水たまりになったり、木材などの捨て

場になったりしているようです。草の上を歩くと土も柔らかで、靴が少し潜りこみます。

シベリア抑留で亡くなった人は約六万。その半分以上の遺骨はまだ回収されません。何故でしょうか。私は怒りに体が震えるばかりです。

続いて、資料③「民主化運動の体験」をご覧ください。

シベリア抑留は、これまでお話したもののほかに、もう一つの側面がありました。それが民主化運動です。

私は七十日あまり入院した後、昭和二十一年の三月末頃、中央病院から退院することが出来ました。その間は日本人捕虜にとって最初の冬でしたから、最も厳しいもので、多くの死者を出した期間でした。

退院後、私はまず二週間の将校室当番をやらされました。作業大隊の宿舎には将校用の小室があり、中には二段式ベッドに数名の将校がいたのです。私は朝三時に不寝番が起こしてくれて、野外で薪を割りペーチカを焚き、湯を沸かしました。それから食事用の飯盒をいくつも持って、将校用の特別食を受け取りに炊事場に行くのが仕事でした。

朝が来ると、将校は、「おい、湯をくれ」ベッドの上から命令調の声をかけて来ます。彼らは一人ひとりが立派な毛布や防寒具など大きな荷物をかかえていました。体格もよく、余裕のある人たちです。室内では平穏な世間話が多く、時には笑い声さえ立てていました。

彼らは一般の兵とは違い、強制労働を免除されていましたので、環境面で兵と大きな差があるのに驚かされました。将校室は暖かく別世界でした。時間になっても野外の労働を強制されることはなかったのです。兵の体験した真の苦しみと心からの悲痛な叫びを知らない人が多かったと思っています。

ソ連側は日本兵に労働をさせるため、当初は旧階級制度を利用しました。将校による軍隊の統制です。それによつ

て兵卒を労働に強制したのです。

昭和二十年の一月から『日本新聞』という捕虜向けの新聞が発行され、各小隊に一部配られました。そこでは広島・長崎に原子爆弾が投下され壊滅状態になったことや、日本国が連合国に対して無条件降伏したことが明確に報道されていました。私はそれを見て、日本が戦争に敗北したことを初めて知ったのです。それまでは曖昧な伝聞しか持っていなかったもので、本心から驚きました。

五月頃には「日本新聞友の会」という会が生まれ、穏健な啓蒙活動が起きました。日本新聞による衝動的な報道や収容所内で起きる日常的な不条理について、みんなで話し合って行こうとするものです。少し年寄りくさくて、分別ある対話だったようでした。

ちょうどその頃、非常に激しい衝撃的な噂が伝わったのです。それは近くの第一収容所で起きた事件でした。

前年の十一月、高山という元東京農大助教が病院から帰って来て、退院報告の仕方が悪いと叱られた時に返答が良くないと数名の将校が怒って撲殺してしまったというのです。事件は私たちの収容所にも伝わりました。「殺すとは何事だ」と、兵たちは怒りました。「将校だからといって許すことはできない。そもそも将校は毎日何をやっているんだ」。一部の将校の態度には、元々疑問を持っていたので、反感が集中しました。「ここは軍隊じゃないぞ。ろくに仕事もしないのに」「そうだ」と、兵の騒ぎが大きくなったのです。「大体、あんなのが将校だと。とんでもねえ。何も出来ねえくせに」。軍隊時代の恨みや反発に火がついて、今でも労働を免除されていることへの批判も出て来ました。

昭和二十一年十二月八日の夜、浴場に元気のよい若者が集まって、青年行動隊が結成されたのです。何とかしなければという気持ちが下から盛り上がり、反軍・階級闘争に発展しました。中心メンバーは二十歳前後の若い兵でした。

難しい理論は分りませんが、ただ納得できなかったのです。「俺たちが、こんなに苦勞しているのに彼らが現場に來たことは一度もない。将校は一体何をしているのか」という考えが広まったのです。「呼び出せ」の聲が、間もなく「吊るし上げろ」に変化したのでした。

資料③②「吊し上げ」を見て下さい。

兵の怒りは軍国主義的分子との闘争となり、将校以外にも、軍隊時代に行つた古年次兵の特権行為や、殴る蹴るのリンチを働く特異分子などにも及びました。軍隊の内部だけに許された特異な習慣にも怒りが集中し、爆発したのです。

「自分のやったことを言ってみろ」「強い兵隊を作るために」「馬鹿野郎！そんなことで強くなるか」「自分はそうやって教育された」「ふざけるな！殴られた方は、お前を恨んでいるだけだ」。将校の反論に対して、青年行動隊が大聲でやり返します。「まだ分からねえのか！この野郎！」「謝れ！謝れ！」「自分のことしか考えてねえ奴だ」「こんな奴が上官なのか」。中には涙を流しながら訴えた者もありました。

もう一度資料③①に戻って文化運動を見て下さい。

それから、壁新聞についても話しておきたいと思います。私の支部には元准尉だった人がいて、『黎明』という壁新聞を出していたのですが、どう見ても同好会的な内容で、ただ民主的と言うだけでした。

私は旧來の意識を払拭して改革しなければという思いで、青年部らしい壁新聞にしたいと考えました。私たちの中にはまだ、将校への遠慮や気兼ねが残っていました。古い迎合的な考えを打破し、卑屈な回避や服従を捨てて付き合

うことを願っていたのです。私たちが堅く拘っている意識に一撃を与えよとの意味で、堅い岩盤を崩すツルハシをもじった『十字鋸』という名を新聞につけました。

『十字鋸』は『日本新聞』という読む新聞とは違い、見る新聞でした。大勢が一度に見やすく、そして語り合うために紙面を工夫しました。字も大きく太くし、ペンではなく竹ペンを使用しました。また、楷書ではなく癖のある図案のような字にしたり、絵を多く入れました。壁新聞の前にはいつも人ががやがやと集まっていたのです。反軍闘争の時ですから思い切って「将校と闘え」というタイトルで書いたことは忘れません。

壁新聞だけではなく、豆新聞も大活躍しました。収容所の後半になってから開設した食堂の机の上に、いつもかなりの豆新聞が置かれるようになりました。豆新聞は日常的な所内の問題や外部の労働の現場などを取材して、身近な話題を提供したのですが、これにはオルグの協力があり、職場のサークル活動とも連携しました。

また、「劇団アガニョーク」の存在も忘れることはできません。バイオリン奏者の南雲という人がリーダー格で、数名の団員がいました。一番思い出になったのは、「根室の灯^{ともしび}」という出し物でした。背景に描いた淋しげな町。女装のスカートの姿。それを見た途端、会場は破裂するかと思うほどの大騒ぎになりました。誰もが絶叫し、早くも声を上げて泣く者さえいました。

三人だけの楽団がテーマの曲を弾き、赤いスカートの女性役が歌った「根室の灯」。

貴方の居ない部屋に来て 独り見つめる町の灯よ

観ている者は、もう我を忘れて全員が立ち上がりました。

〴〵思い灰かな思い出に 都の夢よさようなら

嵐のような感激が体中を吹きまくり、私は日本にいる二人の姉を思い出して涙を流しました。誰もが自分の感情を押

さえることが出来ず、夢の中にいる心地でした。

第二收容所では二年掛かりで民主化運動が進展し、労働面もかなりの成果を上げていました。昭和二十三年になると、ソ連は経済復興のための五カ年計画を一年繰り上げて、四年で達成することになりました。第二收容所の捕虜の中でも、ソ連側と一緒にあって、この一大キャンペーンを遂行しようとの気運が盛り上がったのです。それは民主化運動の成果として、生産（労働）と学習（理論）の一体化（闘争）として、画期的な体験学習でした。私たちはいつしか階級戦士の養成学校に入っているようでもありました。先にも述べましたが、コムソモリスク第二收容所の中で、私たちは「鉄条網の中の民主主義」を学び、「初々しい初期の民主主義運動」を体験しました。ソビエト民主主義の貴重な体験でした。

続いて、資料③「戦死公報と俘虜用葉書」に進みます。

戦争が終わった昭和二十年の夏から、南方の兵隊は続々と帰国しましたが、満州の関東軍だけはその行方もしきりしませんでした。ところが翌年の昭和二十一年十二月になって、突然私の戦死公報が実家に送達されました。家中は言葉にもならない衝撃を受けたそうです。

市の職員が持ってきた書面によれば、一年半近くも前に私がソ連軍に射殺されたという簡単なものだったようです。父は「これじゃ分らない」と怒って、日付、場所、誰が確認したのか、どんな風に戦死したかなど、詳しい説明を求めたそうですが、よく分らない。結局、「こんな戦死の公報は受け取れない」として再調査するように頼んだらしいのです。

ところが三ヶ月後、シベリアから私が書いた俘虜用葉書が届き、そこには「元気です」と書かれていたわけです。生きている、と家中大騒ぎになったといいます。

ちょうどその頃、上の姉は重い病気に患っていましたが、この葉書を病床で手放さなかったそうです。きつと帰って来ると約束した私の無事を知って一週間後、十二月八日の夜に静かに息を引き取ったといっています。

それから更に十ヶ月も経った昭和二十二年九月になって県は戦死公報の取消通知を送って来たのでした。私が満州で戦死したといってから二年以上も経ってこの取消しをしたのです。この間、私の家庭は敗戦とともに、最も大きな悲しみと怒りに巻き込まれていました。

上の姉の死んだ昭和二十一年十二月八日とは、コムソモリスク第二収容所で青年行動隊が発足した日でもありました。あの時の若者たちの熱気の陰で、上の姉は静かにこの世を去っていったのです。私は全く知りませんでした。姉の枕元にいなければならぬ私が、知らなかったでは済まされません。世話になった上の姉には感謝してもしきれないものがあります。冷たくなっていく姉を抱きしめて、「姉さん、約束通り元気に帰って来たよ」と幻の中でも言わねばならぬ自分でした。こうして、上の姉の二十六歳の短い人生は燃え尽きたのでした。

これらのことは、後で日本へ帰ってから知ったことです。満州の戦闘中、南へ南へと歩き続けた山の中、延吉からの移送、そしてシベリアの抑留を通して、私が初めて体験した様々な苦難にも耐え、日本に再び帰れたのは何故なんだろうと繰り返し考えましたが、結局は学生としての進学路線が待っていたことと、上の姉とのあの約束がいつも私を支えてくれたのだらうと思われるのです。帰国後に歩んだ道程でも、遅れた私をいつも支えてくれました。私は「姉さん、ありがとう」と呼び続けたのでした。

次に、資料③④「戦死取消しの通知」をご覧ください。

この書面が私の家に送付されたのは、戦死したといった日から、二年も経っていました。しかも、シベリアから元氣であると葉書が届いてから一年近くも後です。戦争の前線はこのようなに入り乱れ、真実をつかむのが難しいことを物語っています。最初の不確実な情報が誤報となつて留守業務局から県の世話課、それから市の担当へと伝達されたのでした。

続いて資料③⑤「ダモイ」をご覧ください。

シベリアに来て三年の夏、一日の作業を終え、収容所に帰つて来ました。警戒兵は銃を肩から下げて、だいぶ離れてついてきます。入口に入った時、何となく変な感じがしました。所内の空気が慌ただしいのです。他のグループの一人が、こつちに向かつて叫びました。「ダモイだ!」。私たちの足が止まりました。「ダモイだ!早く帰れ!」。あまりにも突然でした。戸惑い、真偽のほどが分りません。先刻までその気配など全くなかったのです。仲間と顔を見合わせた。

—ダモイ—

途端に体の中を強烈な衝撃が走りました。次の瞬間、宿舎を目がけて夢中で走っていました。室内は割れるような騒ぎでした。支部長が「ダモイだ。明日午後、コムソモリスクを出発する」と発表しました。

—ダモイは今度こそ本当だ—

「ダモイだ」「日本へ帰れるぞ」と、みんな腹の底から叫んだ。「ダモイだ!ダモイだ!」と大声で叫び続けた。話をしたこともない者とも力を込めて握手しませんでした。

—この機会を二度と離すものか。絶対に日本に帰るぞ。何があっても—

ダモイ・トウキョウの言葉に騙されて、言われるままにシベリアへ連行され、そして強制労働の苦難を受け続けたが、今度こそ、絶対帰るのだ。

翌日、私たちは競うように空地を歩き、引込線の長い貨物列車に乗り込みました。来た時と同じ硬い鉄の箱でした。貨車の中から外を見ると、広い草むらの先に足かけ四年収容された第二収容所があるはずです。まさか自分の人生の中で、このような生き方をするとは夢にも思いませんでした。

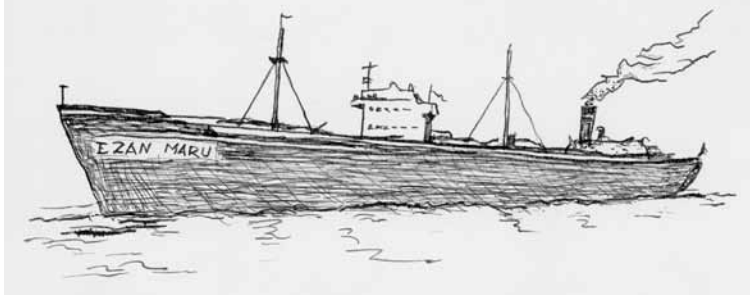
さつき収容所を出る時、警戒兵たちが黙って帰る私たちを見ていました。ソ連の収容所長の姿もちらつと見えましたが、それだけでした。「長い間、ご苦労だった」と労をねぎらうのではないかと思いましたが、全く何もありませんでした。作業現場では仕事の引き継ぎも、「さようなら」も「ありがとう」の言葉を交わす場もなかった。極めて事務的に人員を確認し、そのまま貨車に乗せて帰らせるのか。私たち日本人は単なる労働具としか認められなかったのだろうか。

長い長い貨車は、あの時と同じく、ゆるゆると動き出しました。一緒に働いていたニーナという女性労働者が見送りに来ているぞと言った者もいましたが、確認できませんでした。もし来ていたら、「ボナム・ダモイ（なぜ帰るの?）」と口を尖らせるでしょう。この一方的な、簡単な幕切れに、割り切れないものを感じながらも、揺れる貨車に身を任せ、ひたすらダモイの現実に溺れる自分だったのです。

貨車は来た時の線を通り、ウラジオストク近くのナホトカに着きました。三、四日の手続きの後、日本の引揚船に乗ったのです。その日は七月二十七日でした。

船首には恵山丸と書いてありました。タラップを上り甲板から振り返ると、港が一望できました。右手には果てし

ナホトカ から 恵山丸に乗って



昭20.7.14新造、昭26.6.16八馬汽船（西宮）に売却、昭37.9.7解体

なく続くシベリア大陸があり、気の遠くなるような先にはヨーロッパがあるのでしよう。左手には満州に至る広大な山並みが展開しています。

— やつと解放された —

私は遂に大陸を離れることが出来たのです。

ナホトカを出航して三日目、船は舞鶴に着きました。

港の松の緑が美しく絵のようです。甲板に立ったまま涙が止まりませんでした。小さな岩の上で日の丸の旗を大きく振り続ける人がいて、岩の上から「お帰りなさい」と呼んでいます。久しぶりに聞く、何という優しい言葉でしょう。私は胸が一杯になりました。船は湾内の奥に停まり錨を下して、船中で一泊してから翌日に上陸することになりました。

その夜、船底から横になって高い天井を見ている時に、上の姉が大事にしていたレコードに入っている、私が一番好きだったシューベルトのセレナードを思い出しました。その曲はシベリアの労働の合間などでも時々口ずさんでいたもので、自分だけの世界に閉じこもって

る時に、よく我慢したねと慰めてくれる曲でした。荒んだ気持ちを和ませ、審美な自分の世界を取り戻すのを感じたものです。今、再びこの曲に出会い、家へ帰れることが不思議でした。

翌朝、陸の方から小さな舟が近付いて来ました。そして恵山丸のタラップに、医師と二人の看護婦が上がってきて、三人の白衣が痛いように目に入りました。

看護婦は持ってきた小さな花束を真っ先に私たちの代表に差し出しました。「本当に、ご苦労さまでございました」。白衣の声が、はつきりと聞こえました。

—とうとう帰ってきた—

—日本へ帰ってきた—

私は感極まって言葉も出ず、白衣が潤んで見えるだけでした。感動が波のように後から後から、寄せては返し、胸を押し上げてくるのでした。

次に、資料³⁶「帰郷」をご覧ください。

八月一日、父に電報を打ちました。やっと解放されたのです。大勢の人が出迎えてくれるでしょう。私は何から話せばいいのか迷うほどです。

東舞鶴駅までトラックの荷台に乗って運ばれ、そこから引揚専用列車に乗りました。列車は京都に出て、それから東海道線の上り線に入り、夜行になりました。

うとうとしていた私は、自分の名前を呼ぶ仲間の声に目を覚ましました。思わず立ち上がる私に、一人の女性がワツと声を上げながら飛びついてきたのです。不意のことで何が起きたのか分りません。その女性は私が入隊した後に、

彦根に嫁いだ下の姉でした。思わぬところで出会ったので本当にびっくりしました。

シベリアからの帰国が始まり、引揚列車が彦根を通過するたびに、姉は私がいまいかと探し続けていたのです。私の名前を書いた大きな紙を広げて、名前を呼び続けていたのです。夢のようです。

しかし意外にも、下の姉は真つ先に「お姉さんが死んだの」と震える声言いました。「二年も前に」。まさか、あの姉が。私は耳を疑いました。何ということ。俺はやっと帰って来たのに。その瞬間、目の前が閉ざされたようでした。

—本当か—

下の姉は声を上げて泣いていました。

—ちつとも知らなかった—

シベリアには父からの返信も来ていましたし、みんな元気だと思っていました。私はいきなり殴り倒されたような衝撃を受けました。緊張と我慢の四年間が一度に崩れたのです。

—そんなことが起こるはずもない。ありえぬことだ—

もう永遠に会えない。あの約束は何だったのか。あれほどに耐えて生きて帰ったのに。

次の日の夜、福島に着きました。戦後の電力不足で駅舎は薄暗く、改札口に父と弟の二人が出迎えてくれました。軍隊に入る時は大勢の人が軍歌を歌って万歳万歳と見送ってくれたのに、帰って来た時は人目を避けるように二人だけで、ひっそりと出迎えられたのです。

さて、資料③⑦「転入手続」です。

舞鶴引揚援護局長が発行した引揚証明書には、これを落ち着き先の役所に提出して転入手続きをして下さいと書いてありました。私は帰郷翌日、県庁の世話課に出頭しました。

窓口の職員が、証明書の裏面に何やら記載して、「はい、ご苦労さまでした」と言い、「これで全部です」とも言いました。

私は、県民がシベリアより三年も経って帰国したのですから、知事か副知事かその代理の人間でも出てきて、「よくぞ帰って来られました。本当にご苦労さまでした」とでも言ってくれるものと勝手に思い込んでいました。戦争の最後の幕引き役をつとめた人間を温かく迎えるはずだと思ったのです。

しかし、それは思い違いのようで、単なる事務手続きにすぎないようでした。私は体内から熱いものが一度に吹き出してきた、夢中で県庁を飛び出しました。

しかし、私が復員したことが分ると、新潟県や秋田県などの世話課から、何人もの未復員者について照会が来ました。「煩わしいお尋ねで御迷惑と思いますが、復員の皆様方に依頼するしか無いのでございます。いまだ、どうなたか不明で、私共の心痛となっております。超御多忙中のところ本当に恐縮ですが、どうかお知らせ下さい」といった、心のこもった依頼状が届きました。

続いて、資料③⑧「復員を歓迎しない世相」をご覧ください。

私が日本に帰って来たのは終戦の三年後でした。その間、日本は史上初の戦後復興に直面し、大混乱が続いたようでした。天皇の人間宣言や憲法改正に始まり、衆議院選挙法、民法、教育基本法、教育委員会法、物価統制令など、矢継ぎ早な法律改定が行われました。また、公職追放や労働基準法などとともに、極東軍事裁判も進み、母子手帳の

発行や帝銀事件なども起きました。世の中は食糧不足と配給制、労働力の分配に関する問題などもあり、騒然とした世相でしたが、加えて退役軍人がどっと帰って来たのですから、大変です。

ですから、関東軍総司令官だった山田乙三大将は、ソ連のワシレフスキー元帥あてに「：希望者は成る可く駐満の上、貴軍の経営に協力せしめ、：御使い願度い」という請願書を送り、シベリア抑留者約六十万をなるべく満州に土着させて欲しいという希望的観測ともとれる見解を示したようです。出来ればしばらく帰って来ないで欲しいともいうのでしょうか。

続いて昭和二十三年には、下山・三鷹・松川の三事件が起き、街中がざわめきました。シベリア帰りはアカだ。危険人物だとの声が、よく聞かれるようになりました。私たちシベリア抑留者は、あまり歓迎されない世相だったのです。

昭和二十四年の夏、私は突然吐血しました。肺病になっていました。そこから、医師の気胸療法を数年続けました。当時、米軍から払下げのストレプトマイシンを闇価格で入手し、四十本も打ちました。続いて、パスとヒドラジットの投薬を何年も続けました。

私の日々の相手は、上の姉が残していった四冊の随想でした。繰り返し、繰り返し読みました。亡くなった姉の純粋な優しさに心から癒されるのを覚えました。

―姉さん―

と呼びかけ、戦闘の話も、シベリア抑留の話も、毎日毎日語ったのです。幻の中でも語り、聞かせたのです。また、昼少し前になるとNHKラジオの朗読番組「私の本棚」があり、樫村治子の読む小説を寢床の中で聴いていました。

昭和三十一年、私は病気からやっと回復して、東京で就職しました。七年遅れの再スタートです。シベリア帰りの

病み上がり。しかも三十一歳になっていましたので、私は人の倍も働かねばと思っていました。その頃、政府は経済白書を発表し、「もはや戦後ではない」と述べ、復興から成長期に移ったと宣言していました。そして、「大きいことはいいことだ」「前向きで行こう」という波に乗りました。東京タワーの建設が始まり、毎日少しずつ高くなるのです。新幹線が姿を見せ、オリンピックをきっかけに、超高度成長への道を登り始めたのです。

ここまでで、戦争と抑留の話は一旦終わりにしたいと思います。お疲れになったかも知れませんが、最後に「まとめ」のようなことを少しお話したいと思います。もう少しお付き合い下さい。

資料③⑨「あの戦争は何だったのか」をご覧ください。

まず被害の側面です。日本軍が起こしたあの戦争は、いよいよ最終段階になると、自国の国民を犠牲にしまいました。棄兵と棄民は、日本国民が受けた膨大な被害です。

多くの人が、中国や東南アジア、太平洋など各地で使い捨てにされました。遺骨も放置したままです。開拓団や一般邦人も国策に踊らされ、敗戦になれば、国は「自己責任だ」「あの時は仕方なかった」という態度です。

一枚の葉書で入隊させた国には、無事に実家へ帰す責任はないのでしょうか。それを曖昧にしたり先送りにしたりしています。

これが我々の祖国なのか！と言わねばなりません。この不条理を知りながら、政治家や役人は「自分たちの生まれる前のことだから」「責任と言われてもピンと来ない」とでも思っているのでしょうか。

資料④「加害」の側面。

他方で日本は加害者としての側面も持っています。韓国や中国などの近隣諸国に、限らない恐怖と悲慘を与えました。他国の言動がけしからんと言って、相手を見下す態度を取り、正義の名のもとに相手を懲らしめるという考えでした。膺懲の思想です。

彼らに対する加害としては、シベリア出兵、七三一部隊、南京事件など無限の蛮行が残っています。彼らは恨みをいつまでも忘れず、憎しみが憎しみを生み報復の連鎖となっています。今、事実を並べて反論しても無駄です。激しい感情の問題となっているのですから。事実をいくら言っても解決しないのです。韓国の元の大統領が、恨みは千年も続くだろうと言ったのはそれを物語っています。

続いて、資料④「私の心情」をご覧ください。

私は、元砲兵の幹部候補生でした。昭和二十年八月三日（ソ連が侵攻する一週間前です）、試験合格の発表があり、即陸軍上等兵になりました。そして復員した時は陸軍兵長に昇格していたのです。

私は滅私奉公、生命懸けで働きました。それは私の誇りです。しかし、結局は国の犠牲になったのです。見捨てられ、玉碎せよと言われ、援軍もなく四散消滅しました。私の犠牲については誰も語ってくれません。

また、私は功労者ではありますが、侵略者でもありました。現地で乱暴した軍隊の一員です。アジア全体では二千万人もの死者が出たのです。戦争は本当に残酷です。

私は前線で生き残り、そして捕虜になりました。戦陣訓の本訓では、「生きて虜囚の辱を受けず」「名を惜しむべし」と教えられました。六十万という大軍とともに捕虜になったのです。恥とは思わないのでしょうか。戦いに負けて、

「すまない」とは思わないのでしょうか。そんなことはありません。私は屈辱感と罪悪感から逃れられないのです。

戦争が終わって、総司令部の長官をはじめ、かつては玉碎せよと命令した参謀たちが、みな生きて帰ってきたのです。将校たちは「みんな、お互いに苦労したなア」と、つくづく語るだけです。

国はあの戦争を未だに総括したとはいえません。未だに責任を取ったとは思われなのです。七十二年前のあの時を「一億総懺悔」といつて一段落したのでしょうか。今の原発も年金にしても、誰の責任だったのでしょうか。想定外で片づけてしまい、真に向き合おうとしないようです。中途半端で曖昧です。

おわりに、資料④「これからは」をご覧ください。

最後に申し上げたいのは、日本がまず心からの謝罪をするべきだということです。日本国民に対しても、近隣諸国の人たちに対しても、日本軍が起こしたあの戦争によって莫大な被害を与えたことに、その犠牲者たちに、勇気をもって、本当に悪かったと心から謝罪することが大切です。もうこれまでに何回も言ったじゃないかという話ではありません。何回でも何回でも、心から詫びることです。

私は平成二十三年に、内閣総理大臣名で、「多大の苦難を強いられた御労苦に対し、政府として衷心から慰藉の念を表します」という書状をもらったことがあります。しかし、「強いられた御労苦」に対して、政府は何をやったのでしょうか。説明もほとんどありません。「慰藉」する前に、心からの謝罪をしてほしいと思います。それはカネをくれと言っているわけではありません。何を恐れているのでしょうか。

そして、日本がこれからどんな国を目標としてやっていくのかを、明確に具体的に示すことが大事です。単に「平

和な国」とか「美しい国」というような漠然とした概念ではいけません。世界中から尊敬される真摯な精神的な姿です。自他への悲しみを忘れない、恥や正義の国です。それが日本の望む文化であると宣言して欲しいのです。

また、各国には自国の立場や利害がありますが、それを相互に理解し共感し信頼することに、あらゆる努力を払うことです。これらを押し進めるため歴史教育を徹底して実施することも必要です。諸外国に比して日本はあまりにも歴史教育を削減しすぎています。そしてこれらを実行する上で大事なことは、徹底した議論を重ね、合意形成の努力をすることです。こだわりや恨みを捨てて、二度と戦争をしないと誓うことが、最も大切だと思います。

人の生命というのは、人が想い出す間は生き続けるといいます。私はそう信じています。今も満州の原野に、シベリアの凍土に遺棄されている何万という将兵たちだけではなく、戦争のために亡くなった全ての人たち。その一人ひとりの悲しみや悔しさを生涯忘れないで過ごしたいと思っています。

戦争は本当に人類最大の悪です。再び戦争の惨禍が起きないようにしなければなりません。平和主義・人権尊重の立場から全力を挙げてその達成を誓うものです。

幸い、早稲田大学の掲げる「WASEDA VISION 150」には、「世界の平和と人類の幸福の実現に貢献する研究」を旨指すと書かれているとうかがいました。私も、早稲田OBの一人として、世界の平和、人類の幸福の実現に貢献したいと願っております。

以上をもって、「私の体験した戦争と抑留」の話を終わりにいたします。皆さんお一人おひとりの、さらなるご健闘をお祈りいたしております。

主な参考文献・補足

- (1) 半藤一利『ソ連が満州に侵攻した夏』（文春文庫、二〇〇二年）。
- (2) 資料⑩肉攻：ボール箱などに火薬を詰めて、至近距離から敵のキャタピラに投げつける戦法。しばしば抱え込んだり、背負いこんだりして、敵戦車の下に身を投じ自爆する戦法にもなった。
- (3) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 関東軍2』（朝雲新聞社、一九七四年）。
- (4) 『戦陣訓』本訓其の一、第三「軍紀」。
- (5) 『福島民報』一九五三年十二月十三日付「第五軍第百三十五師団長人見与一中将証言」。
- (6) 『陸軍習志野学校』（陸軍習志野学校史編纂委員会、一九八七年）第二章「迫撃第十三大隊」。
- (7) 福島県世話課「死亡告知書」昭和二十一年九月。『迫撃第十三大隊史』（迫撃第十三大隊史編さん委員会、一九八〇年）「第二中隊」の「戦死（行方不明）者」。
- (8) 「日本人捕虜の移送責務・労働現場への派遣。今年八月から十月までの期間に。シベリア同志に。国家防衛委員会議長ヨシフ・スターリン（一九四五年八月二十三日）。富田武・長勢了治編『シベリア抑留関係資料集成』（みすず書房、二〇一七年）。
- (9) 富田武『シベリア抑留者たちの戦後』（人文書院、二〇一三年）。

(10) 同『シベリア抑留』（中央公論新社、二〇一六年）。

私が体験した
戦争と抑留

松本茂雄

15年戦争の歴史

昭和	6	1931	柳条湖、中国軍鉄道爆発。満州事変始まる(7月)
	7	1932	満州国建設(3月)
	8	1933	国際連盟から脱退(3月)
	9	1934	ヒトラー独大統領に(8月)
	10	1935	布国議会議事堂完成。支那事変始まる
	11	1936	2・26事件(軍事クーデター)
	12	1937	南京陥落(12月)。日独伊防共協定(11月)
	13	1938	国民総動員法公布(4月)。零戦誕生(7月) 漢口陥落。重慶無差別爆撃
	14	1939	ノモンハン事件(5月) ドイツ軍ポーランド侵攻(7月)。第2次世界大戦開始
	15	1940	日本軍仏印に戦力進駐(7月) 日独伊三国軍事同盟(7月)。ドイツ大勝利続く
	16	1941	戦陣訓発布(1月)。ドイツ軍ソ連に侵攻(6月) 日ソ中立条約締結(4月)。関東軍特別大演習 ハワイ真珠湾攻撃(12月)。日米開戦(12月)
	17	1942	アメリカ東部を初空襲(3月)。シンガポール攻略 フィリピンマニラ占領。ガダルカナル島奪取は、玉砕(5月) ミッドウェー海戦大敗(6月)。山本五十六大將戦死
	18	1943	アッツ島玉砕。イタリア無条件降伏 兵役法改正(11月)。徴兵引き下げ(12月)。学徒動員(12月)
	19	1944	インパール作戦惨敗(7月)。サイパン島陥落(7月) グアム島玉砕(8月)。神風特攻出撃(10月) 硫黄島敗退。連合艦隊フィリピン沖でほぼ全滅(10月)

昭和 20 年 (1945)	1A	関東軍作戦計画訓令発令(抗戦部隊は玉碎せよ)
	2A	第124師団創設
		ヤルタ会談(米・英・ソ首脳会談、ドイツ降伏後3ヶ月以内に満州侵攻 侵攻・大輸送作戦を決定)
	4A	ソ連が日ソ中立条約の廃棄を通告(1年の猶予期間あり) ヒトラー自殺
	5A	ドイツ無条件降伏(8日) 日本は連合国との講和締結をソ連に仲介依頼を決定。 同交渉進展せず。日本は世界に孤立無援に。
	6A	(26日)スターリン命令「日本の占領する満州及び朝鮮半島を攻撃目標とし、 直に戦斗準備を整えよ」 日本は空襲連日受く、崩壊寸前。
	7A	佐藤大使、モスクワにモロトフを会見申込む(13日) アメリカ初原子爆実験成功(16日)
	8A	ソ連、巧み外交を引き伸ばし(2日) アメリカ慶島に原爆投下(6日)
		ソ連、スターリン全軍に8月9日午前零時、満州侵攻開始を命令(18日)
		昭和天皇が、天皇宣言無条件受諾を聖断(14日)
		日本、無条件降伏を全世界に発信(15日)
		関東軍総司令部 停戦命令と完全打ち崩れ状況混迷とに伝達困難。

学生から入隊へ

昭和 18 (1943)	4A	才一早稲田高等学院入学	
19 (1944)	6A 秋(?)	大型自動車運転免許取得 徴兵検査(寄附地・半込世役所)	東伏見練成道場合宿 軍の御殿敷場演習場合宿 代々木練兵場観閲式参列
	8A	建物疎開(天現寺) 昭和電工新丸安工場(合宿)	
	9A	自動車部徴用(1名)	東部軍至理部直轄・印旛飛行場
20 1945	2A	入隊通知来る。	印旛飛行場に送達。 高等学院に休学届提出。 下宿先整理(新村茶師前)。福島へ。
		2月25日・福島駅壮行会(11時)・萬載々々・大雪ストッ7°・姉との約束。 郡山駅前集合(12時)・哀号・乗車出発(行先不明) 上野着(夜半)・東京へ・大金蔵・火災・焼跡	
		2月26日・大阪へ	
		2月27日・大阪着・結団式・	軍装・4島田中尉同僚・満州へ
	3A	3月1日・早朝大阪出発軍用列車・博多～釜山～満州 3月10日・満州の虎林着	零下20°・迫害者13大隊へ入隊
		3月11日・迫撃砲取扱による初年兵教育	
	4A 5A	5月末	・軍陣訓心得。 ・残忍冷血な初年兵教育。 ・外部情報遮断。
	6A	興凱湖畔へ馬主宅	
	7A	移住に移動	・才124師団に編成替 ・大陣地構築作業
	8A	8月3日・幹部候補生に合格発表	

入隊通知

二月二十五日正午

郡山駅前ニ集合セヨ

兵科・追毒兵



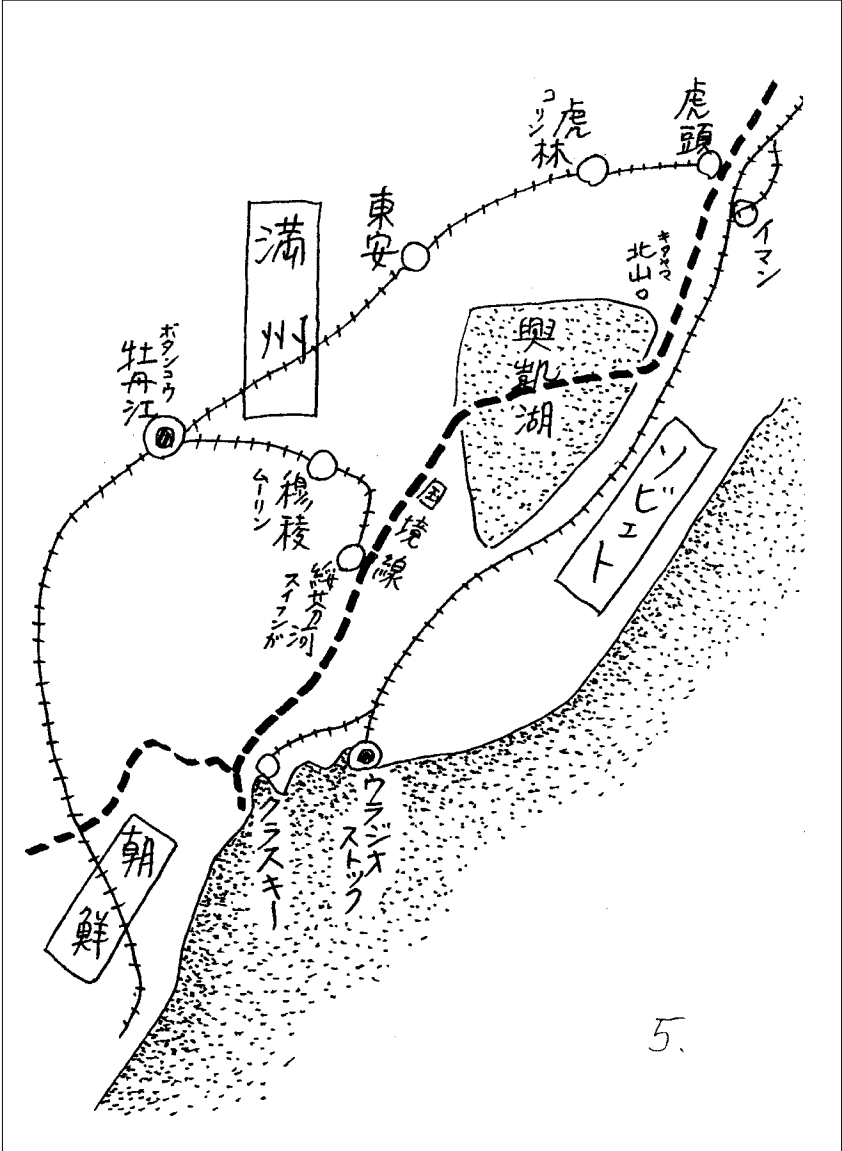
上の姉

「きつと帰って来るのよ。」

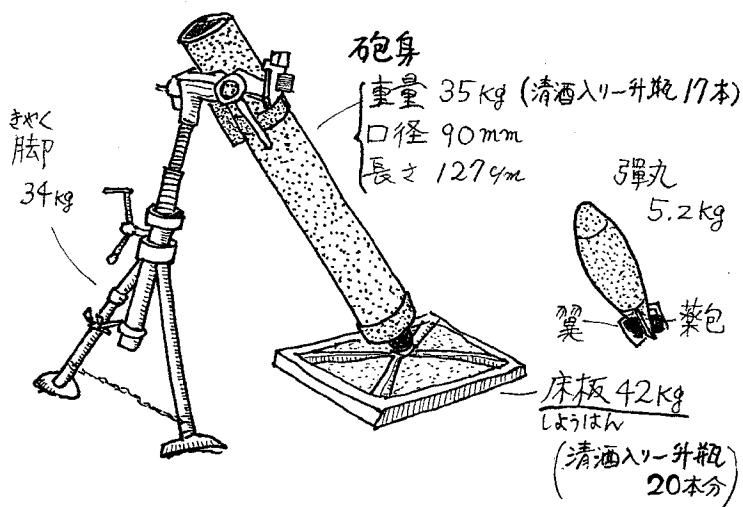
いっわね。

約束よ」と。

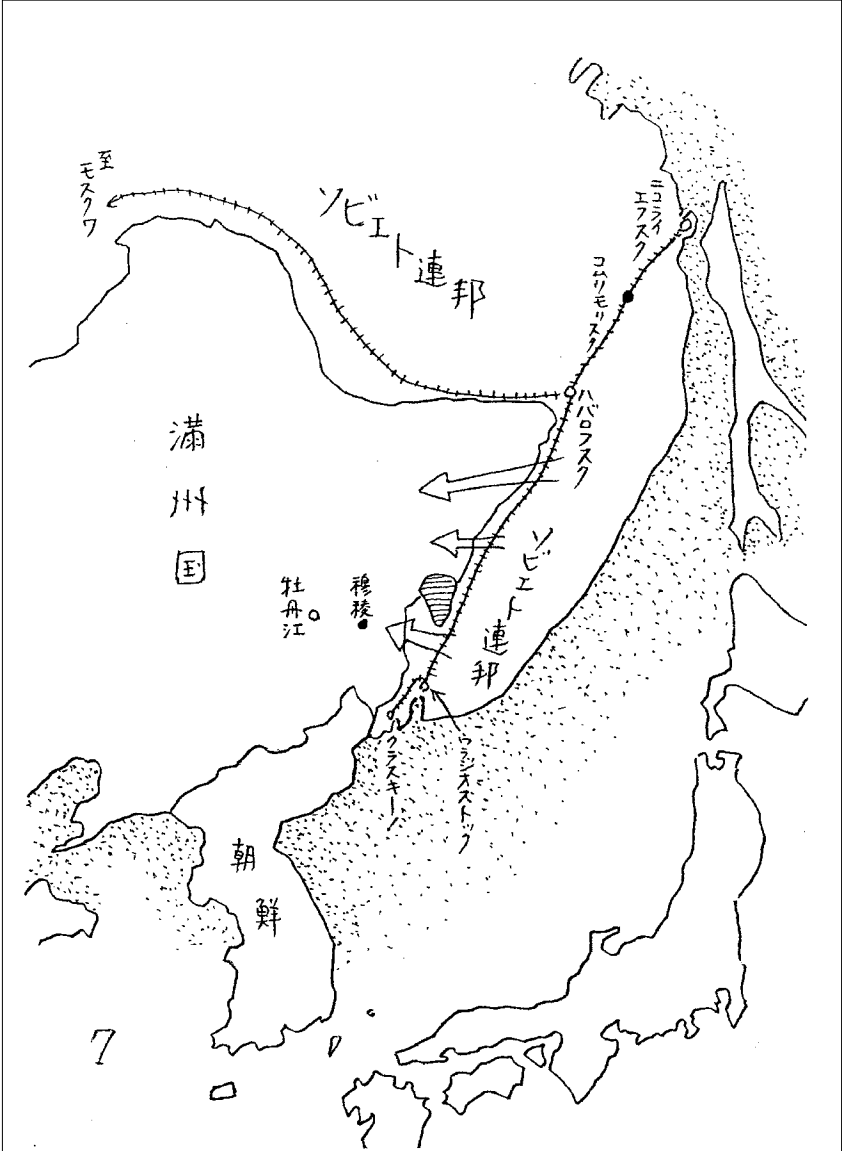
行先も知らず、そのまゝ出発



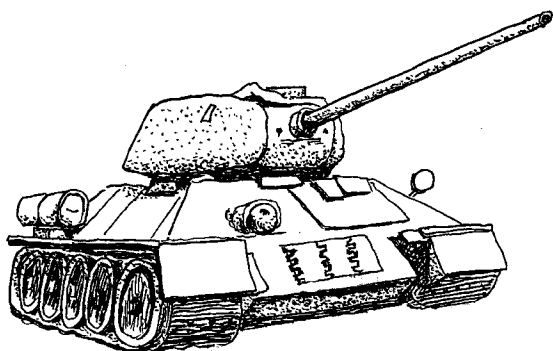
迫撃砲 (概要図)



最大射程 3,800.メートル



ソ軍のT-34型戦車



T-34型

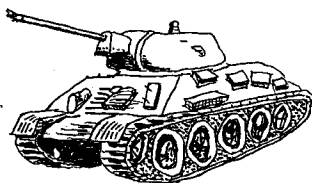
1941~42.当時世界最優秀評価.

重量28t. 85mm砲装備.

前面装甲70mm. 時速50km.

前進中の連続砲可. 機関銃6.

垂直の壁を乗り越える. 2.5mの割れ目・1mのコンクリート壁・4m水深の川
砲のほか、火炎発射・煙幕を出す. 過去出来る.



8.

(平凡社・世界大百科事典13.)
P.70~71・411~2 註

ムリン 穆稜の攻防戦



穆稜の激戦 (凄惨!)

敵

敵の攻撃によって
砲臺で立木が吹き飛んだ。
土臺が崩れ、壁はバラバラ。
空気がヒリヒリと言えて、ガガガと
無気味な音。耳が外に飛んで来た。
強い硝煙の臭い。橋梁状の谷間
に割れた橋や管線が渦を巻く。
野砲隊の白い幕が吹き飛ばれる。
傷付いた軍馬が苦しんでいる。

敵の戦車は一部に、凄惨な
木を押し倒し、壕を押し潰した。

味方

味方の重砲が砲撃。
天が裂けたと思われる大音響。
ゴーンという音が山腹に響いた。

追撃隊は夜間、出来て240
発の榴弾を発射。穆稜街の
敵駐屯地を焚いた。

特攻(角攻)出撃。
黄色火薬と箱詰めし、房中に負けた
敵戦車へ突入した。
用意は梅度の様な微笑に口許
を歪めた。

柴田軍曹

「俺達の中から五人の
肉攻用員を出すことに
なつた」

「誰か自分から志願
する者はいないか」

軍曹の視線を
避け、息詰る

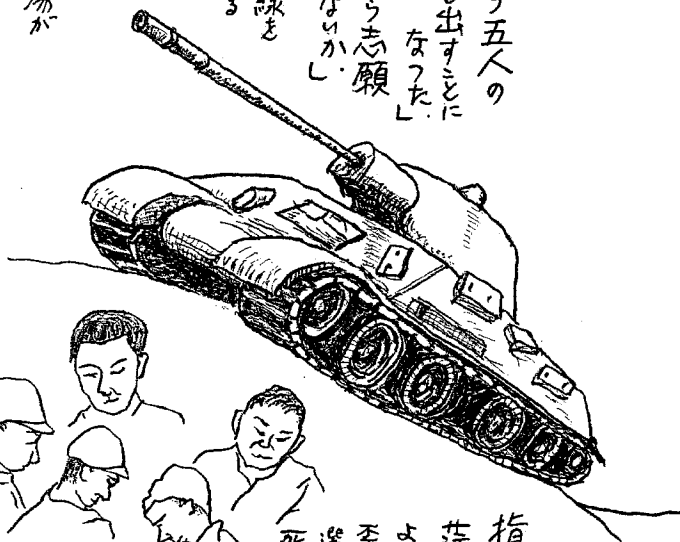
思いに油汗
が流れた。

胸の鼓動

が痛くなり、

体内を熱湯が
走る。

少しでも動けば軍曹の目にとまり
選拔される。石の様に動かない。



指名された五人は

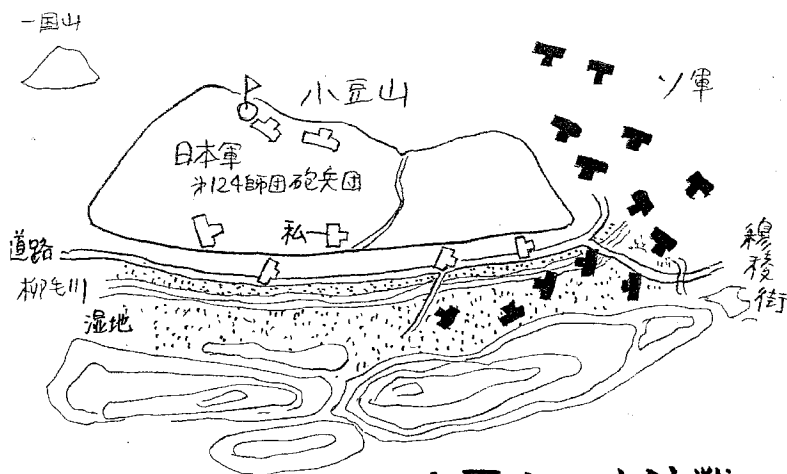
汚れた土色と侮蔑の
ような微笑が口許を醜く
歪めていた。

選別された自分自身と
死と押し付けた同僚への
遣り場のない蔑み
を見た。

肉攻

用員選出

10.



小豆山の攻防戦

—8月14日—

砲撃戦

砲撃で頭上の木々は激しく揺れ、ジリジリと音を立てて燃え始めた。

強烈な爆薬の臭いが立ち込め、

石硝煙は白く火垂幕となり、立木に絡み付いた。

山全体が地震し崩壊するばかりの衝撃。
ブズブズと立木が燃え、あちこちで火の手が上がった。

敵歩兵は近づきつゝあった。



11

白兵戦に突入した。(敵味方の歩兵・斬り込み)

『関東軍作戦計画訓令』

昭和廿年一月

12

対ソ持久戦考案の基本方針

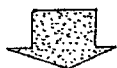
- 一、侵攻し来るソ軍に対し国境地帯に於いて既存の築城施設・地形・集積物資を利用し、これを撃破す。
- 二、爾後満洲の広域と地形を利用し、ソ軍の攻撃を阻止し持久を策す。

・・・(中略)・・・

これが為に一般に挺進遊撃戦を懲慚する。持久作戦による主たる抵抗は国境地帯に於いて行い、これがため兵の重点は成る可く前方(注、国境寄り)に置き、これら抗戦部隊はその地域内に於いて玉碎せしめる。兵力の二重使用、武器資材の追送補給は原則として予定しない。

第124師団 必死の抗戦

	日本軍	ソビエト軍
兵員	15,000 ^人	150,000 ^人 10倍の敵
装備	<ul style="list-style-type: none"> 古い精神主義 (絶対服従 死は名誉 建前主義) 戦車ナシ 弾丸僅少 	<u>近代的重装備</u> <ul style="list-style-type: none"> 丁-34重戦車 自動小銃 狙撃銃 自走砲



第124師団 玉砕

- ・6名の部隊長 戦死・自決
- ・多数の将兵戦死
- ・生存者 1,200人 (四散消滅)
- ・ほぼ全滅 累累たる遺体の山

決戦下の命令

状況	指令	部隊	問題点
昭和20年 1月 (基本方針)	関東軍総司令部命令 関東軍作戦計画訓令 (死守せよ・補充せず玉碎せよ)		精神主義
8月9日 (1号侵攻)	山田乙三大將全軍に指令 楠公精神に徹し 断固戦を抜くべし	命令の不統一 に戸惑い	命令
8月11日 (移接戦)	大陸令(大元帥命令) 満州を放棄しともいふ意(?) 朝鮮を保護すべし (満州に抗撃し、朝鮮へ後進)	肉攻	
8月14日 (小豆山戦)	天皇の決断 ポツダム宣言受諾を聖断	王碎	意思決定 合意形成
8月15日 (降服通報) (停戦命令)	無条件降伏宣言 大本営・関東軍総司令部 全軍に「停戦命令」布達	生存者・時待残 個別战斗中 停戦命令の 伝達不徹底	判断 思考力
8月16/17日 (大混乱)	第124師団 所在不明	生存者待残中 捜索隊派遣	
8月18日 (統帥解除)	第124師団通報 統帥解除 遊撃戦に入るべし	機能停止 四散消滅 →南進	革新性

小豆山の麓で 敵に発見さる

絶対絶命・脱出不能



射殺されたと同僚は報告

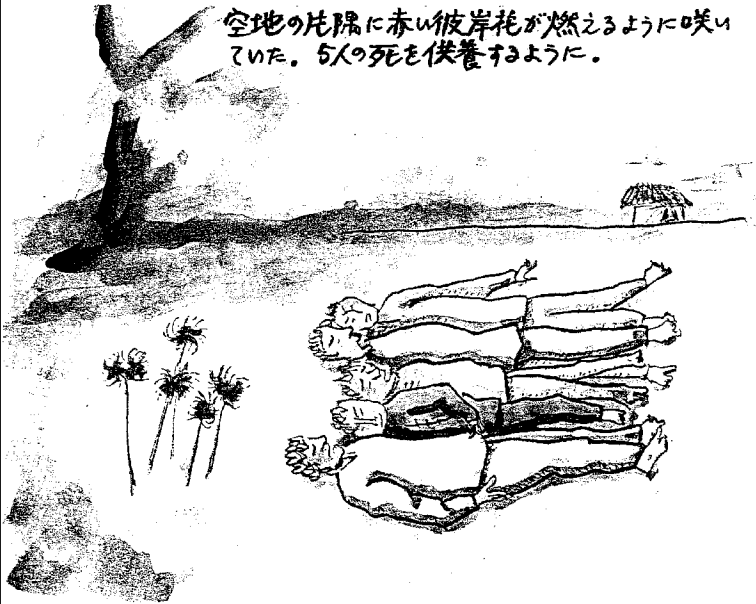
↓
棄兵された

15. 留守家族には後日「戦死」と公報された

満人一家の犠牲

我々のために協力してくれた満人だったが、我々の行先をソ軍に教えるのを恐れて古年次矢が全員を殺害した。

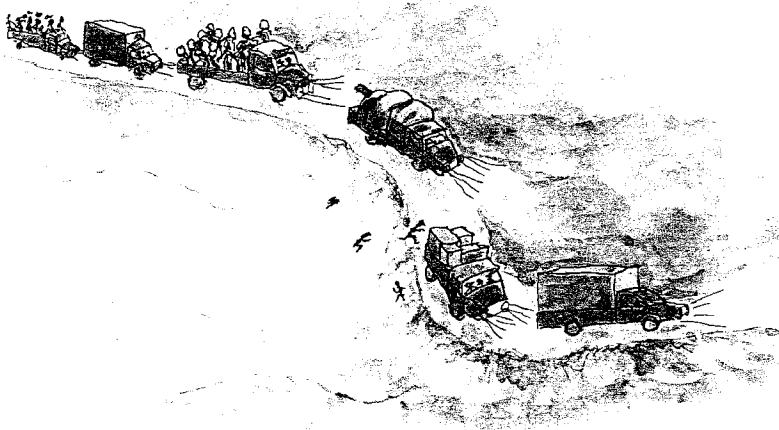
空地の片隅に赤い彼岸花が燃えるように咲いていた。5人の死を供養するように。



それを知った軍医は憤慨して、荷物をまとめて独り部隊から遁脱していった。軍務を放棄した軍医は、その後行方不明。ロシア語が堪能な彼は、今も復讐していない。

牡丹江道路の突破

何千台とも知れぬ勝ち誇った敵の戦車や車
輛が一本の道路をスピードを上げて通過する



こゝを突破するしかないのだ。眩しいライトの中に
飛び出せなり。心臓が蹴られたように痛む。
1台がカーブを切った瞬間、私は飛び出した。

同じ頃、500メートル先の代馬溝で同年矢ら20人ばかり
敵に射殺された。

国からも軍からも見捨てられた悲運
連行される開拓団員に出会う

ネルジャー
ダバイ・シュター



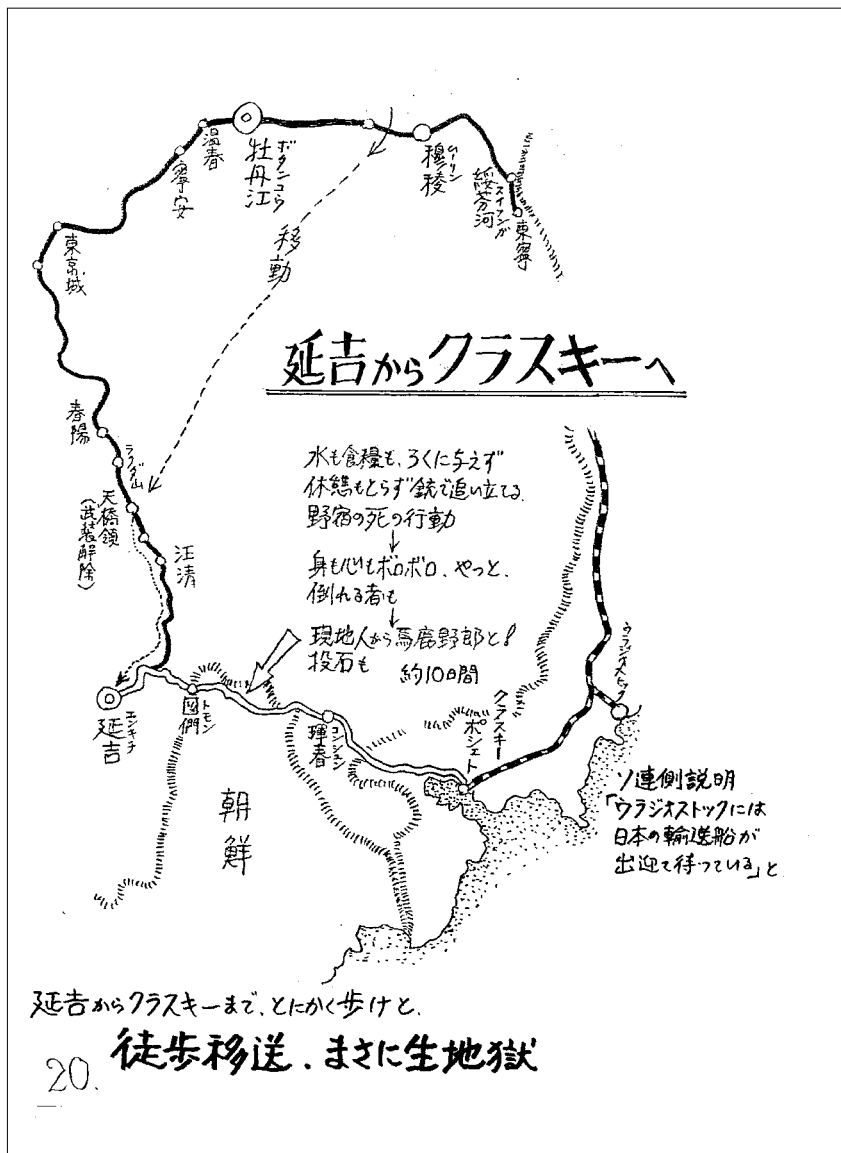
200人以上の一般邦人。

「兵隊さん、兵隊さん助けて」「この子を助けて」

と泣きながら飛び出て来る。

ソ連兵は女性を押し戻し、引き倒しても止めさせようとする。自動小銃を空に向けて発射し威嚇する。
大騒ぎになった。

19.



非人間的貨車輸送

極寒

冬の到来・鉄板の冷たさ・隙間風・夏服
ボロボロ・暖房なし・負傷者多い・死者も

詰め込み

50~60・70人・足も伸ばせない・
服を踏みつける・窮屈・体力衰弱・

着いた時、全員フラフラ

施錠

針金補強も。

小さな排使用の穴

下痢多く、間に合わない。
周囲の汚水・悪臭充満・
停車中の人糞マット・

小さな窓ひとつ

鉄格子・電灯なし・暗い・
外の様子判らない。

情報皆無

どこを走っているのか、何時着くのか・
次は……不安。

ノロノロ走行

頻繁な長い停車・渋滞か・時速20km
指示待ちか、

21

家畜輸送同然
野蛮で犯罪的

途中、行先変更

迎えの船が来ない。

約1週間

騙した→絶望

降りろ! 汽笛ボ〜 → 船だ. 港に着いたぞ!

強制抑留の伝達

寮屋同然・ゴミだらけ
電灯なし・暖房なし.
猛烈な寒さ.こゝはコムソモリスク.
強制労働に.
逃亡は禁止(射殺).

→ 何だと!

(日本人は20年・ドイツ人は終身)

衝撃!

何がなんだか
判らない.→ 誰が決めたのか. 帰国の筈.
何故だ. 馬鹿された.

頼れるものは何もない. → もう駄目だ!

体力衰弱. フラフラ. 仲間もいない. 地理判らず. ロシア語出来ず.
逃げられない. 食料ない. 寒い. 何も出来ず.

絶望!

→ 室内はしんと静まり返った.

10月22日の深夜

翌朝. 7人の遺体

→ 彼らだけ日本へ帰った.

自殺していた.

22.

シベリアの強制抑留所



ソ連領内 2,000箇所以上収容。

1. 日本軍捕虜の労力利用。

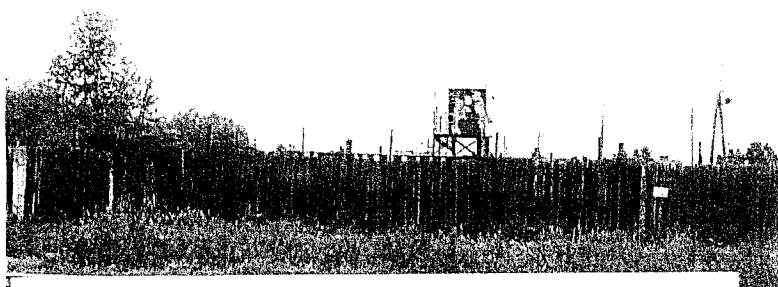
ソ連経済復興急務
 労力不足

1945年8月23日
 ソ連国家防衛委員会
 スターリン決定

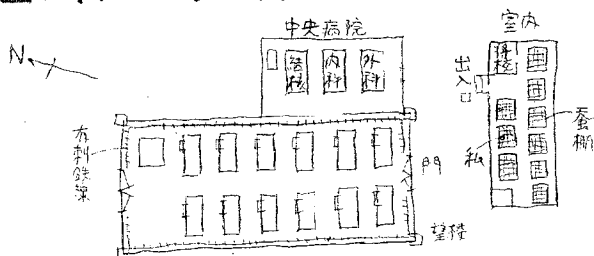
2. ジェネーブ条約に違反。

3. 日本人 609,448人 (極めて不正確)

4. 全体の7割がハバロフスク・ウラジス地方に収容され
 強制労力を課せられた。



コムソモリスクオニ收容所



シベリア強制抑留の三重苦

酷寒

零下50°
40までは野外労働
凍傷の危険。

何もかも全てが凍りついた世界。
光も音も色も失った静寂な大地。

目の周りを除いて、防寒着と完全武装
吐く息に凍りついた顔マエ毛、鼻毛。
瞬きさえ不自由になる。

警戒兵カンボイの
ダバィ、ダバィ、ダバィ!!

初めての体験・生き方
慣れぬ冬、労働、時間束縛、体力衰弱
冬の穴掘り、重いバール。

とにかく耐えること。
ものを考えないこと。
馬鹿になって生きること。

一日々々も**必死**で生きる

飢餓

ソ連は深刻な食料不足
自国民も大飢饉。

満州から略奪した分を捕虜に
横流しも。

米・英からの援助物資
1,700トン

米

飯盒の中蓋一杯程。
飯盒の半分。
蒸く水っぽい。穀類が少々。

パン

1日300グラム
ドイツのアーレン
ビッソンの所
と同じ(?)

分配には厳密・公平を。
空罐・物指。

顔はクチャクチャに。
別人の様に、老人凡。

25

捕虜の話題は「帰ること」と「食いたること」

強制労働

最初の冬は**強制的**(タバイ・ラポート)

警戒兵が自動小銃で。
現場監督カマンジルの言う通り
出来ないとは帰さない。

初めての極寒。
不慣れの肉体労働・骨がシリシリ
体力激減・病人も。
空腹・フラフラ

最初の冬が終ると**ルマ**達成するように仕向けられた。

・ルマも意識させた。
・達成を厳しく要求。
・時間を延長してもやらせた。
・罰する
・達成に応じた給食。

自殺者も

自主的な作業改革へ(労働と学習)

・居住条件の改善
・ハラショー・ラボター
・生産競争

・鰻の家。
・文化運動。
・壁新聞
・青行隊

生産競争に
積極的参加

厳しい毎日!
ハラショー・グループ

26

「帰りたい」・「帰りたい」・「帰りたい」

想像を絶する 苛酷な抑留

酷寒

飢餓

シラミ・発熱・下痢

身中シラミだらけ、潰しても潰しても、
血しぶき、痒くて痒くて、眠れない。
発疹ちぶす。
疥癩、何回も便所へ、雪の上、紙がない。

強制労働・ノルマ

情報断絶

原爆がデマを、日本政府は我々に直接何もしてくれない。
日本は我々を見限ったのが、ドイツ降服も原爆も知らず

発病・怪我 (中央病院)

(私) 戦中の怪我・充足化膿
入院手術。
麻酔ナシ・クスナシ・薬ナシ
傷痍軍人。
七転八倒の痛み、神も憐れ。

死者激増

中央病院で、
2,000人も死んだ。
シベリア抑留60余人(70万か)中、6万以上が死亡。
その7割が最初のひと冬に。

遺体処理・埋葬

素裸に、胸に青インクで番号。
外で冷凍体に。トラック搬出。

冬は凍土で掘れない、形だけの土。

春になって大型カラス → 大きな穴を掘り埋めかえ。

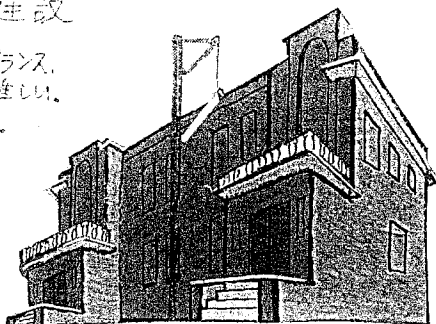
俺は帰るぞ、絶対死なない！ バラバラ、誰か分らない。

27.

カテージ"建設

ターチカは重い、バランス、
モルタルづくりは難しい。
腕・腰・ヘトヘト。

70年近く経つても
ビクともしない。
カラフル、美しい。
(動作分析も)



ザコッセルノー 糧秣倉庫



一度、スイッチを入れた
シ休めない。手を
休めれば糧秣の
山になる。

背中の骨がミリミリ。
3倍制労働、
ホコリで真白だらけ。

来る日も
来る日も

アムールスターの溶鉱炉修理

平煖の内部耐火煉瓦交換。危険な作業
敵も味方もない。必死!



アムール河の糧秣荷揚げ

歯も食いしばり、
全身油汗に。



終わなければ
帰れない。

あれから70年。気も遠くなる歳月。
運命に翻弄され犠牲になる恐ろしさ。
立ち竦むばかり。

〈捕虜の埋葬地〉



民主化運動の体験

旧階級制度

将校による統制・作業大隊との二重

21年1月
から

日本新聞

教育・宣伝・組織化
強い知識欲

同6月
から

友の会

新しい世話役・啓蒙・穏健的
オ！牧畜所・東豊大助教
高山事件・一部将校の変わりぬ態度

同12月
発足

青年行動隊

オルグ・アクティブ活動・行動的
反動分子を叩き出せ。

22年

反軍・階級闘争

初々しい初期の民主義・学内の社会・ルールを体験学習した。

似非(えせ)・年長者の処世術
吊し上げ・密告・斗争組織
理論武装・革新的組織
軍国主義的分子との斗争。

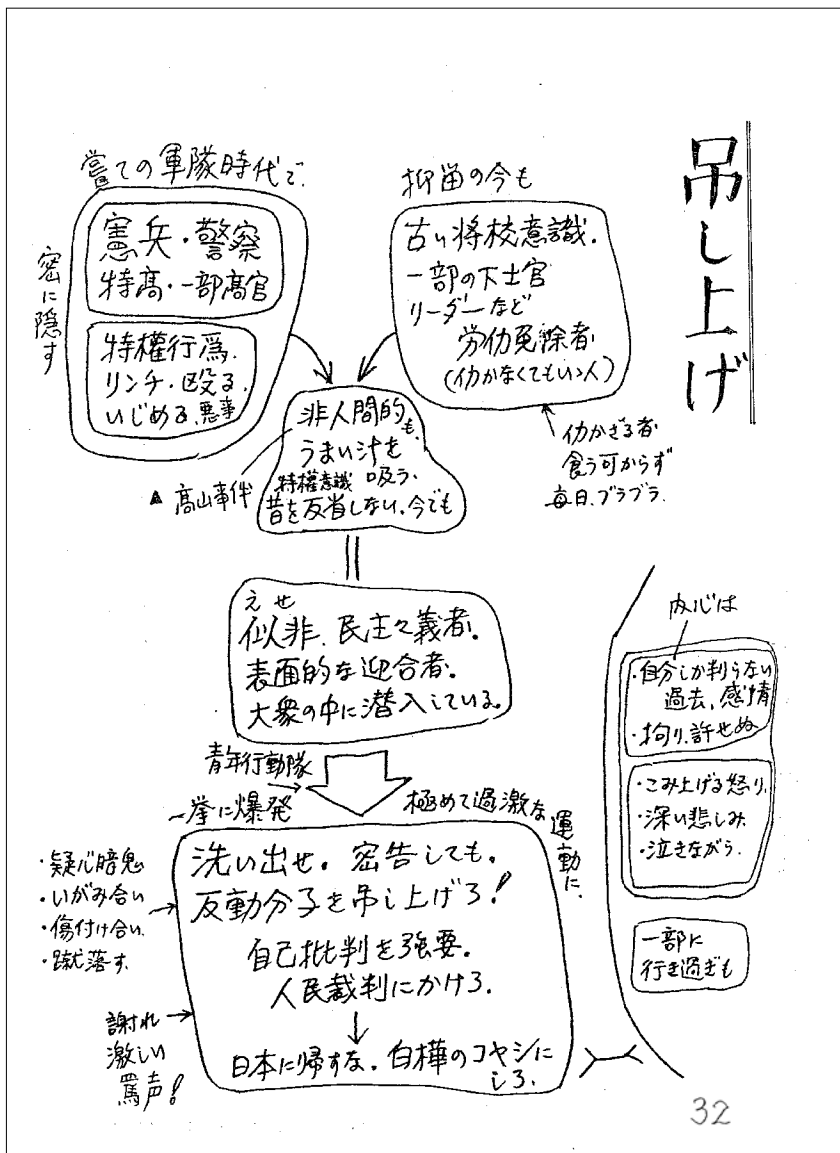
文化運動

劇団アガニョーク・壁新聞「十字鉄」
職場サークル活動・豆新聞・生活改善

23年

生産競争

5ヶ年計画を4年で！
生産と学習の一体化(斗争)
階級戦士の養成学校・画期的な体験。
初めての学習

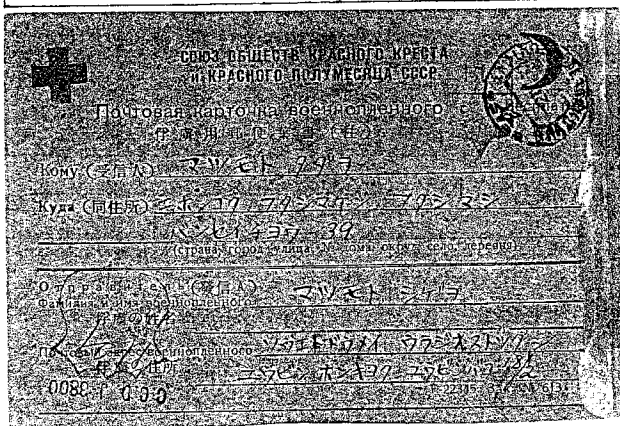


昭和21年9月、私の戦死公報が送達 → 父、返却

戦死公報
の3ヶ月後
に

誰が確認したのか。どこを射たれたのか？ 再調査

昭和21年12月初、シベリアより捕虜ハガキ届く



生きていた！ 大騒ぎに！

昭和21年12月8日、上の姉はこのハガキを枕許に置く

キット帰って来るのよ、約束した！
サベ、待ってくれなかつたの。

その
10ヶ月後
に

昭和22年9月2日、県より戦死公報を取消す

1年も経って。

昭和23年2月、モスクワより短波放送で

通牒(島)

ニニ世報第三四九號

昭和廿九年九月廿日

福島県世話課長

福島市長殿

ソ領残留者について

置衆はニニ世及第三四九號を以て本籍地村長經由に報告し戦死した旨を告知書送付したが、個人も家族はソ領に生存してゐる通牒信が来た事は就いて當課は留學業務局に照會中の処此程同様の戦友の申出によつて処理した旨回答があるが、戦友石垣哲雄は眞実を調査せるところ愛媛戦死となつた他の戦友の又同様に留學業務局に通報した事が判明した戦友石垣哲雄は家族に連絡して、状況を申上た旨申出するも現住所も不明なり通報した
右の如く生存してゐると認め戦死が確定する一切書類は之を取消し本籍地村長にも通報した旨石垣哲雄の家族に連絡してあげたい

戦死取消の通知

34

DOMOI
タ モ イ

強制収容が**3**年たって
突然、帰国が許された

35

帰郷

彦根駅で 8月1日 夜9時

下の姉と再会

地元新聞で特別列車の通過時刻を知る。
「松本茂雄」と大書した紙を拡げて列車の端から
端まで呼びまわっていた。
大勢の人々、騒然として駅頭、夢のような再会。

最初の言葉

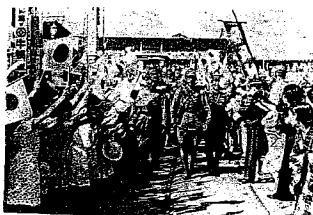
「お姉さんが亡くなった」2年前に。(何を言んだ)
その時刻は12月8日夜(あの時刻、青年行動隊発足)
あの約束は(モット帰ってくる)と強く約束したのに(何故)
全てが崩壊した、軀が震えて、血の気がひいた。
(もう永遠に会えなり、そんな話あるか〜)

上野駅で 8月2日 ひる

全員が代々木の共産党本部へ帰国挨拶。入党手続き。
私ひとり腰が立たない。(夏の熱風の中、ガラッとした車内)

福島駅で 8月2日 夜10時5分到着

薄暗い電灯、駅舎
父と弟だけの出迎え。
ひっそりと、淋しい街。
引揚も歓迎しない雰囲気



10年前の帰還兵

◎**揚** 熙急用味增醬油特配購入券

引揚證明書

松本 大正 14 年 9 月 11 日生

終戰當時住所 世田谷 移住 敬 察 氏 同停家族數

年一月五日 麥霍港に上陸したことを證明する

辯鶴ひし引揚ひきあ援護えんご

名	年	齡	們	氏	名	年
微	西	氏				

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

又

給興金品配石	氏顯入合共	或
--------	-------	---

[illegible]

卷四

毛	布	寶	寶
---	---	---	---

云入壳

壹組

○揚 應急用味噌醬油特配購入券

裏面

八公世帯の分割、定着地に於ける
市街部町村が記載すること。

取扱者氏名印

與五〇四

給

10. The following table shows the number of people who have been convicted of a crime in the United States since 1970. The number of people convicted is given in thousands.

...

書在提示

特配購入券

卷之五

人
分
5
1

しき込ん

六

金額	期	金額
164	10月	164
500	11月	500
1150	12月	1150

昭和23年8月3日 文部省
福島縣世話課 渡藤 保

復員を歓迎しない世相

人間天皇宣言・憲法改正・衆議院選挙法
民法・教育基本法・物価統制令・公取道放令
極東軍事裁判・母子手帳・食料不足・配給制……

下山・三鷹・松川事件裁判

ベリヤ帰リ・アカデ・危険人物

吐血発病→斗病生活

ストマイ闘 7,000円×40

パス・ヒドラジット・両肺炎胸

回復の見通し立たず
しつとも構ってられない(国も世間も)
独り取り残された感じ(孤愁の思い)

・私の相手

上の姉の残した4冊の随想と追想
NHKの私の本棚(柏村治子)

・私の戦後処理

戦死した戦友の遺族への連絡
戦地で別れた戦友との連絡
他県よりの依頼「どうか、お知らせ下さい」返事
私の戦争ファイル作成

病氣治療・就眠(7年遅れの31歳でやっと)

出来れば暫くは
帰って来ないで欲
しい。

関東軍総司令官
山田乙三大将
8月27日付 諸願書
ワシントンキ一元帥あて

「希望者は、なるべく駐
満の上、貴軍の聖堂に
協力せしめ、……」

「右帰還の間は
極力貴軍の聖堂に
協力する如く、仰使い
願ひ度いと思ひます」

その「往用」を申し出た
と受けとられ、かぬな
い文面!

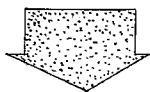
あの戦争は何だったのか

被害

戦争がいよいよ孤立無援・最終段階になると

自国民を犠牲にした

棄兵・棄民した



- 1枚のハガキで入隊させた国には戦争が終れば国に帰る義務がある。
- 国のために働いた多くの将兵を放置している。
- 戦争の後始末もよくしない。
曖昧にして中途半端、先送り。

戦争のこの不条理

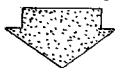
これが我々の祖国なのか

加害

他国に大きな加害を与えた。

近隣諸国に対して 恐怖と悲慘を与えた

ヨウクヨウ
膺懲の思想



- シベリア出兵(1918～1925)
- 南京事件(大量の捕虜殺戮)
- 731部隊(3,000人7生体実験)
- 慰安婦
- 満人一家殺害
- 朝鮮人労働
- 各地の乱暴・暴行

恨みはいつ迄も続く・報復の連鎖(憎しみが憎しみを)



今、激しい感情の問題に・事実をいくら言っても解決しない。

私の心情



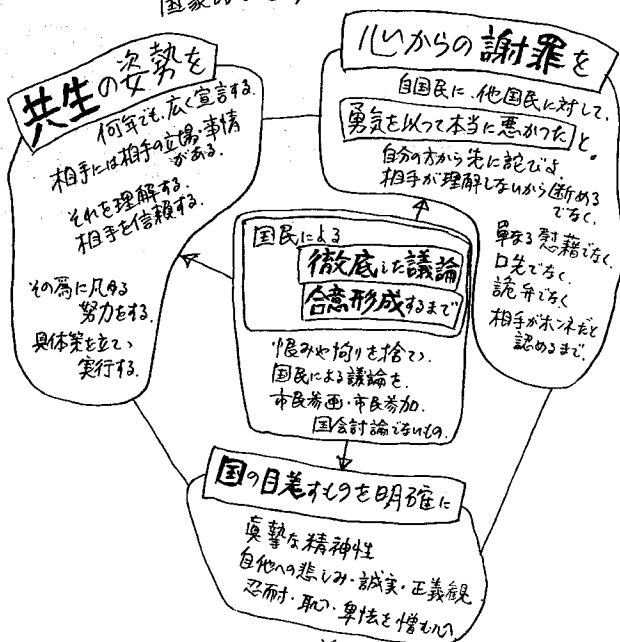
戸惑い

自分にブレーキをかけているような。

国は、あの戦争をいまだに総括しようとしな
真に向き合おうとしな。基準となるものが定まらない

これからは——

国家的な運動を展開したい。



△ 日本は何事も、漠然とした概念の文化
曖昧・中途半端・あやふや